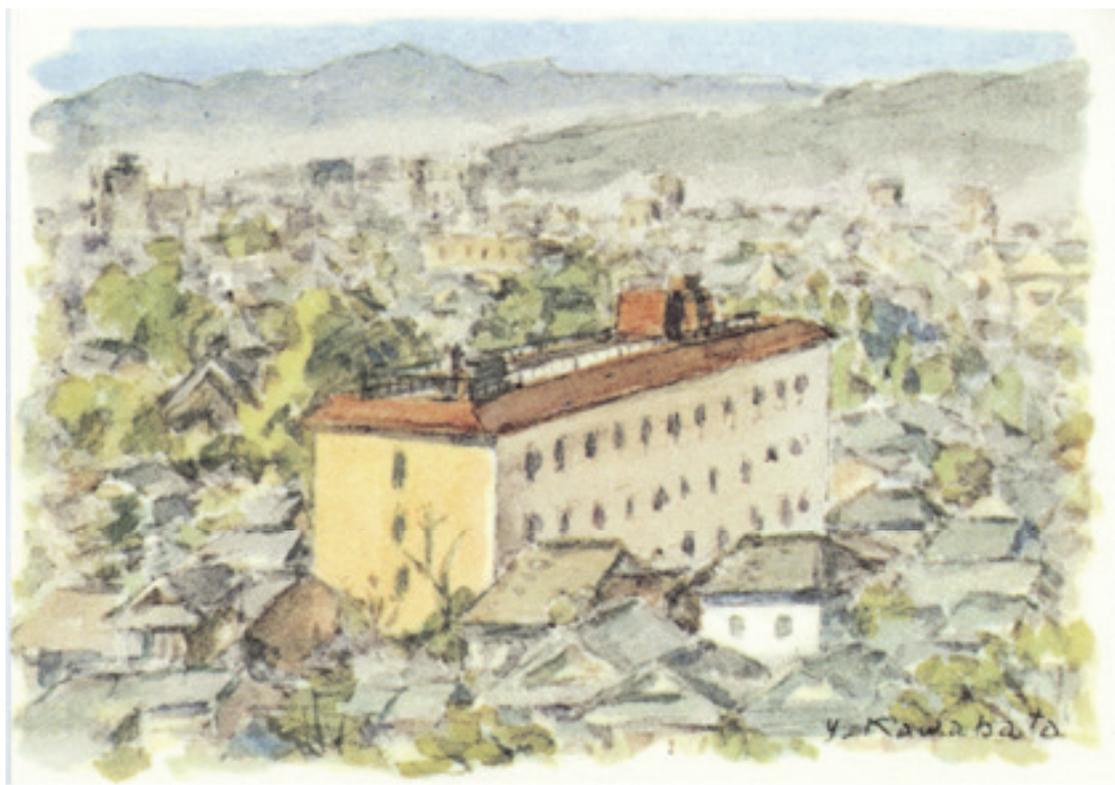


(公財) 京都国際学生の家
Kyoto International Student House



研究者棟新築及び
本館耐震・改修工事に向けて II

YEARBOOK 2017 Vol.42

<http://hdbkyoto.jp/>

Kyoto International Student House ・ Haus der Begegnung Kyoto

PRINCIPLE AND PURPOSE

by Dr. Werner Kohler

“Haus der Begegnung” is a house where men from different continents and cultures, of different races and colors, different social strata, religions and outlooks live together. The house members face realistically the difference of national, cultural and religious backgrounds. It is a “House of Encounter” as its name “Haus der Begegnung” indicates. It is an experimental training place for peace, which is not merely absence of war, a training place for the construction of a new form of society necessitated by the demands of the world of tomorrow.

The house life is guided by the following considerations.

1. The living together in the International Student House Kyoto is not an end in itself. Nor is it a world of its own. It is concerned with the daily human society to which we all belong. Our human society, as history shows, is in need of constant renewal. Forms of society change, old traditions decline, new ones arise; but Life Together is the destination of man.

2. Life Together is life in relation with others, with those we like and those we dislike, with those who have different convictions and opinions. Life Together means love and respect for those who are different. We have the freedom to agree to disagree with one another.

3. Life Together is life in daily renewal. We all have a natural inclination to favor our own beliefs and concepts. The house members let themselves be mutually questioned and challenged in their opinions, attitudes and habits. By nature we are inclined to have relations with, and fulfill responsibilities to, our own family group and those of our own social milieu or those that are useful to us. We aim to outgrow these self-centered inclinations. Life Together allows for diversity and runs counter to conformity and unconformity. The traditional societies classify people according to their educational, political, moral and financial standards. Life Together transcends these traditional classes.

4. Life Together is an adventure and an experiment. “Haus der Begegnung” in Kyoto practices in small dimension a new form of society. This new society is both conservative and revolutionary in that it respects the past with its traditions and looks to the future with its possibilities. It is a form of society which is renewing itself in free self-criticism of its members. The basis of this Life Together is Life itself.

Thus it is hoped that students living in this house are willing on their own initiative to participate in various activities such as seminar-like meeting, common meals and house chores of different kinds.

*Dr.Kohler was the most central among the forwarder of HdB in 1965. He and Dr.Inagaki served as the first House Farther.

表紙の絵は、創設時に作られた絵葉書の一部 作：川端 彌之助

川端彌之助（1893-1981）は大正から昭和にかけて活躍した洋画家です。関西美術院で澤部清五郎に学び、その後大正 11 年にフランスに渡ってギュスターヴ・モローの弟子であるシャルル・ゲランに師事しました。帰国後は梅原龍三郎にも参加していた美術団体・春陽会に入会し、創作活動を行います。戦後には京都嵯峨芸術大学の前身、嵯峨美術短期大学の教員となり、創設期より洋画を教え、多くの後進を育てました。

HdB の近所に住んでいたことで、HdB が出来たときに描いてもらい、絵葉書にしました。

内海博司

巻頭言

HdB は単なる「混住」型留学生寮では無い -国際平和の実験所、真の「国際的共生」型留学生寮-

内海 博司

(HdB 理事長、京都大学名誉教授)

(公財)京都国際学生の家は、建築後半世紀が経ち、建物の老朽化が顕著になっている。昨年10月から本館の耐震・改修工事、研究者棟の改築を掲げて、募金活動を始めている。2000年には大改修を行ったのだが、水道の鉄管を交換する余裕がなかったため、昨年末には本館4階のトイレが詰まり汚水があふれたり、正月早々には地下の排水ポンプの故障、更には研究者棟である西館の壁から水道管の水漏れが起きるなど、応急修理に追われている。建物を改修し日本列島を襲う大地震にも耐えられる本格的修理を、一日も早く行いたいと努力している。

この募金活動において、半世紀も前に日本人学生が留学生と対等の立場で「共生」する留学生寮として作られたという特徴を告げ、存続の意義を説明し、本学寮の窮状を訴えても十分には理解してもらえない場合が多い。その理由の一つは、日本人の学生数が減少し、国際化を掲げて留学生獲得に力を入れる大学も増え、混住型宿舎が主流になってきたことであろう。つまり「混住」型の留学生寮は特に珍しくもなく新鮮みもない、本学寮の役割も終わったのではという反応である。

公が造ったにせよ民間が造ったにせよ混住型の「留学生寮」が注目されるのは、留学生が日本人学生と一緒に生活することによって、日本語の修得や日本人の友人を得ることなど多くのメリットもあるし、日本人学生にとっては日本に居ながら留学したと同様な経験ができる教育効果あると考えられ、筆者も大学などに提案していたことである。

しかし「混住」型の留学生寮に関して、入居する留学生の出身国については余り注目されることはない。

来日する留学生数に対して、まだまだ留学生宿舎が不足しているので、大学や地方自治体や民間も留学生用の宿舎を建設するが、日本人を入れたくても、来日する留学生をまず入居してもらわざるをえない。結果として来日する留学生の数に比例する結果となり、同じ国出身の留学生ばかりが、日本で一緒に生活を共にしていることになっている。

来日している留学生の出身国を見ると、平成27年度の日本学生支援機構の統計では、アジアが93%と圧倒的に多く、次が欧州の3.3%そして北米の1.3%と欧米諸国が続き、アフリカ0.8%、中東0.7%、中南米0.6%、大洋州0.3%となっている。例えば京都府内の高等教育機関に在住する留学生の総数は8,011人だが、中国4,074人、韓国1,323人、

台湾351人、アメリカ合衆国241人、インドネシア215人、ベトナム185人、タイ167人、マレーシア117人、そしてドイツ91人、フランス78人、インド61人、香港53人、ミャンマー46人、イタリア42人、英国39人、バングラディシュ38人、オーストラリア36人、フィリピン33人、ロシア33人、カナダ31人と続き、国別では著しい差がある。このような状況で、混住型留学生寮や混住アパートを作っても、必然的に同じ国の出身留学生ばかりとなる。そうすると大多数を占める国の言葉や風俗・習慣・宗教が強くなりがちで、当学寮HdBのように、寮内で話す公式言語は「英語と日本語」という制限を付けることさえ非常に難しいことになる。

「日本人と留学生が共生する留学生寮(HdB)」(11ページ)として、本学寮の特徴や運営の仕組みを詳しく述べたが、設立者のコーラ博士は本学寮を「国際的な人間教育の場」と位置づけて「外国人学生と日本人学生とに提供する学寮という生活の場は、表層的な共存ではなく、異なる国家あるいは民族の間に厳然として存在する人種、宗教、慣習、文化さらにはイデオロギーといったものの相違を、寮生相互に対決(confront)させ、これらの相違を互いに認め合った上で、1個の人格としての『出会い(Begegnung)』を体験させる道場である」と定義している。そして、この「出会いを通じて、相互の相違を認識し、相互に承認し合うという、きわめて厳しい努力と体験を通じて得られる寛容(Tolerance)が、人類普遍の願望である人類共存の道を達成する有力な手段である」という趣旨と目的(Principle and Purpose)を掲げている。

この趣旨と目的のように本学寮は、現在流行している単なる「混住」型の留学生寮では無く、真の「国際的共生」型学生寮である。この趣旨と目的を達成するルールは、HdBに入寮出来る留学生は1ヶ国からは3人まで、日本人は1/3(約10人)という厳しい入寮制限である。更に京都の大学に在住する学生は誰でも入居できるというルールであり、ここには大学格差は存在しない。これらの制限によって、HdBの趣旨と目的は守られ、維持され、これまでに81ヶ国から1,000人程の学生が集い、世界中で活躍している。

一般にアジア圏の人達の発想は日本人とよく似ているところがあり、会議であまり議論に参加しなくても一旦行事のスケジュールや役割が決まると、その目的のために集団として行動するのは得意である。ところが欧米圏の人達は議論には非常に積極的に参加するが、集団的行動は苦手である。そのため集団的行動を取らねばならない多くの行事を行うHdBではトラブルが良く発生する。更に、HdBの寄宿舎生活では、トイレやシャワー、台所などが共同使用なので、その使い方などを巡ってトラブルも当然国際的である。これらのトラブルを契機にグローバルな議論せざるをえないことより、人種、文化、宗教等の多様性を尊重し、個人と個人との「出会い」を重視した「国際平和を築く人材養成の場」が実現している。更にこのようなトラブルの解決の補助者として、ハウスペアレント家族と一緒に住み込み、学寮運営委員会という経験豊富な学識経験者のサポート体制を作っている。

更に隠れた人数制限がある。総学生数の制限である。現在の学生数は34人であるが、本来ヒトが徹底的に意見交換する場合には少し多すぎる人数である。軍隊の一番小さ

な単位が10人だそうだが、コミュニケーションが取れる最適人数は6～8人だと言われている。もともとHdBは、この半数の16人の学生グループで会議や行動をする予定であった。しかも開寮当時にはハウスペアレント（住み込みアドバイザー）が2組（スイス人家族と日本人家族）居たこともあり、各階（12人の学生）ごとに、別々のミーティングや行事をすることが考えられていた。しかし、我々学生達の猛反発（私も当時の1期生でした）を受け、全学生34人一緒にミーティングや行事をすることになった。事実、34人ではハウスミーティングの運営は非常に難しいが、学生達の代表5人を選出、前もってハウスペアレントと代表（チーム）が意見交換（チームミーティング）を十分にしておくことでハウスミーティングが運営されている。

今回の本館の改修にあたり本館自体の改築も検討された。その時、建物を大きくして収容人数を増やす計画も出て議論された。幸い本館の建物自体は少しの改修で耐震強化が図れることが判明して、その議論は消えた経緯がある。しかし、現在、多くの大学で建設されている混住型の施設では、どうしても学生数が多いため、100人規模の施設もあると聞いている。そのような大規模の学生寮の運営をどのように考えられているのだろうか。

このユニークな特徴をもつ我がHdBを「人類の未来を見据えた実験所」として、維持続けたいと考えている。皆様のご協力をお願いしたい。

～ 目次—CONTENTS ～

・内海 博司	巻頭言：HdB は単なる「混住」型留学生寮では無い —国際平和の実験所、真の「国際的共生」型留学生寮—	1
・目次		4
【ハウスの改築と維持発展】		
・内海 博司、吉村 一良	研究者棟新築と本館耐震補強・改修工事支援の募金趣意書	6
・平野 克己	支援のお願い（募金活動半年で企業から 20 万円の現実！）	9
・内海 博司	日本人と留学生が共生する留学生寮(HdB)	11
【ハウスにおける国際交流】		
・ A.Hidding、Y. Iida	Ain't No Mountain High Enough	15
・村田 翼夫	「国際教育研究フォーラム」例会と情報交換	16
・内海 博司	留学生の大学選びと THE 世界大学ランキング日本版	21
・平野 克己	50 年ぶりの「留学生」との関わり	26
・鈴木 松郎	HdB とボーイスカウトとの関係	30
・永井 千秋	京都国際学生の家 募金活動所感	33
・アンドレアス・ルスターホルツ	諸宗教の理解に向かって	35
・諏訪 共香	国際交流で気付いたこと	37
【HdB を巣立って】		
・ Ta-Yan Leong	Thoughts on the reconstruction and continuation of the Haus	39
・ Ahmet Onat	Mutual Respect	40
・金 智華	Out of HdB	41
【レジデントより】		
・岡田 明日馨	HdB での人生	43
・津田 夏帆	HdB の大きな輪	45
・ You-Shan Tsai	A letter to recommend living in HdB	46

• I-Ting Huai-Ching Liu	The Climate Change in HdB across 3 Years	47
• Ramongolalaina Clarissien	Great accomplishment	49
• Mathieu Fevre	HdB and its great social life	50
• Juliane Späth	HdB:One house, different people, different languages and cultures, but one family	51
• 大川 夏海	心を育む家、それが HdB だって気付いたんだ	52

【活動報告】

• 2017 年度 京都「国際学生の家」活動表		55
• 2017 年度 Welcome Party speech (April 2017)		56
• Sports Day (前期)	当番代表 Sarasa Amma (Japan)	57
• Seminar (前期)	当番代表 Chiaming Shen (Taiwan)	58
• トリップ (前期)	当番代表 Ji Seul Park (韓国)	59
• International Food Festival	当番代表 Christopher West (England)	60
• Sports Day (後期)	当番代表 Hossam El-Sakka (Egypt)	61
• 感謝祭	当番代表 武田 桃子 (日本)	62
• Christmas Party	当番代表 Manohar Rutvika Nandan (India)	63
• セミナー (後期)	当番代表 Nayoung Kim (韓国)	64
• High-Tech	当番代表 Fevre Mathieu (France)	65
• 募金活動 PR	当番代表 岡田 明日馨 (日本)	66

【資料】

• (公財)京都「国際学生の家」役員等		68
• 2017 年度 寄付金・献金等		70
• 特定寄附金の募集に関わる募金目論見書		72
• (公財)京都「国際学生の家」の略史		73
• (公財)京都「国際学生の家」利用者の集計		77
• 後援会会則		80
• 施設概要		81
鈴木 松郎	編集後記	82

【ハウスの改築と維持発展】

研究者棟新築と本館耐震補強・改修工事支援の 募金趣意書

京都国際学生の家沿革・特徴

今から半世紀前の1965年、(公財)京都「国際学生の家」(Haus der Begegnung: 出会いの家、以下HdB)は、スイスや日本の篤志家の寄付金により私立の留学生寮として設立されました。京都大学の南、約500メートルの地(聖護院東町)に位置しています。留学生と日本人学生が「共同の生」の実践を目的としており、ハウスペアレント(ボランティアの住込み管理人)が学生と一緒に住み支援するという、官立の寮にない大きな特徴を有しています。

活動継続の必要性と条件

冷戦時代後「多極化」が進み、その流れの中で、9.11のテロ以来、パリやベルギーなどで大規模テロ、民族・宗教にまつわる対立が表面化、「グローバル化」と「貧富の格差」が拡大、反グローバル化、自国優先主義やポピュリズムに流れようとしているなど国際社会は変化を続けています。設立以来、50余年が経過しましたが、人種、文化、宗教等の多様性を尊重し、個人と個人との「邂逅・出会い」を重視して、「共同の生」を掲げて活動を続けてきたHdBの存在価値は、従来にもまして、ますます大きくなっています。しかし、創立50周年の節目を迎え、建物の耐震診断を行った結果、阪神淡路大震災・東日本大震災・熊本大震災など大地震に対する本館の耐震補強と、研究者棟の取り壊しの必要性が明らかになりました。

募金計画

今後更に半世紀にわたって安定して継続するため、本館の耐震補強を含む経年劣化の補修に加え、大学に來訪する海外研究者だけでなく企業に來られる外国人なども入居できる新研究者棟を設置し、①多文化共生拠点、②国際民間企業連携拠点、③コミュニティ防災拠点とすることを計画しました。本計画の実現には2019年度を目処に、本館補修で1.5億円、研究者棟新築に1.0億円、総計2.5億円の資金を必要とします。HdBの在寮生、卒業生および広く企業、財団、各種団体、個人の皆様からの募金により達成したいと考えます。是非、この趣旨にご理解を賜りお力添えを賜りますよう心よりお願い申し上げます。

なお、ご募金は、当財団では「税額控除」の対象として認められ、「**税額控除**」または「**所得控除**」いずれか有利な方式を選択していただくことができます。

2017年10月1日

公益財団法人京都国際学生の家

理事長 内海 博司(京都大学名誉教授)

募金委員長 吉村 一良(京都大学教授)

新たな社会貢献をめざして

私たちは、これまで果たしてきた役割を踏まえつつ、社会貢献という観点から主に次の3つの役割を構想し実践していくための準備を行っています。

➤ 多文化共生の拠点

近年、国家間、民族間の対立と格差はますます拡大し、世界各地で痛ましいテロが多発しています。異文化に対する偏見が拡大しつつある今こそ、文化・民族・宗教の多様性を尊重し、寛容の精神で相互理解を深めるべき時とされます。仏教寺院の本山が多数立地し、世界一の国際観光都市である京都こそが、この異文化コミュニケーションの場として最もふさわしいのではないのでしょうか。そこで、京都国際学生の家を宗教間対話の推進拠点として、また異文化コミュニケーションの実践場と位置づけられるように、今後さらに工夫し努力したいと願っています。

➤ 国際民間企業連携拠点

国際的な経済・文化摩擦が拡大する中で、民間企業の果たす役割はますます重要となっています。幸い、京都には数多くの歴史的建造物、自然豊かな居住空間、大学等の文教施設とともに、創造的かつ国際的なモノづくりを行う地場企業が数多く立地しています。しかも京都で創業した企業の多くは東京に本社を移転せず、海外から高く評価される“京都ブランド”を形成してきました。そこで、これらの地場企業のご支援のもと、京都国際学生の家を留学生と地場企業との交流を推進する拠点として活用したいと準備しています。例えば、企業の国際研修生などの入居や研修機会の提供、他方、地場企業による留学生向けのインターンシップのご提供など、双方向にとってメリットのある仕組みを構築していきます。

➤ コミュニティの防災拠点

近未来に想定される南海トラフ地震はもとより、地球温暖化に伴う異常気象によって、よりリスクの高い自然災害の発生が関西方面でも危惧されています。その際、「災害弱者」としてしばしば忘れられがちなのが大会場に住む外国人や留学生です。災害発生時に必要不可欠な避難情報や気象予報が、彼らにはタイムリーに届けられないのです。そこで私たちは、京都国際学生の家を留学生寮としては京都初の防災マンションとして位置づけ、国際防災拠点としての役割を果たしたいと計画しています。具体的には、行政実務者、消防署等との防災連携のもと、研究者、市民（近隣住民）、地場企業、NPOなどと連携することによって、防災・減災のためのネットワークと情報システムを構築します。

1. 募金の目的と使途

(公財) 京都国際学生をの家の本館の耐震補強・改修工事と、西館（研究者棟）を建て替えて作る「新研究者棟」の建設に資するものです。主な使途は以下の通りです。

なお、大口のご寄付で、使途の特定を希望される場合には、個別にご相談させていただきます。

2. 資金計画

初期の目標を約1.5億円とし、目標達成後も研究者棟の新築費用約1億円を目標として設定しています。

- 本館の耐震補強・改修工事：約1.5億円（税込み）、耐震強化工事と老朽化した電気水道等の設備の改修工事、食事会、セミナー、礼拝の場、講演会、多言語会話教室、スポーツ室等のほか、地域に開かれたホールとして、災害時の避難所として活用します。
- 研究者棟の新築（木造2階建て）：約1億円（税込み）、老朽化した研究者棟（西館）の取り壊し・新築。研究者・学者用の宿舎収入は、学生達の宿舎代を補助し、年長の有識者と学生との日常的な交流が目的であったが、今回の新研究者棟は、研究者・学者だけでなく、留学生と地場企業との交流を推進する目的もあり、会社などに来日された外国人技術者の宿舎としても活用します。

3. 研究者棟新築及び本館耐震補強・改修工事後の部屋数の変化

	現在	新築、耐震・改修後
学生室 (7.86 帖)	34 室 (本館 2F、4F)	34 室 (本館 2F、4F)
研究者室 (単身)	5 室 (本館 3F) (7.86 帖) 2 室 (本館 3F) (15.72 帖)	12 室 (本館 3F) (7.86 帖)
研究者室 (夫婦)	3 室 (西館) (6.90 帖) 1 室 (西館) (13.81 帖)	2 室 (研究者棟) (15.04 帖) 7 室 (研究者棟) : 4 (21.06 帖)、2 (22.06 帖)、1 (22.56 帖)

(表中、網かけ部分は夫婦・家族部屋です)

4. 研究者棟新築と本館耐震補強・改修工事支援の募金

個人1口 1万円、法人1口10万円、いずれもできるだけ複数口でご協力をいただければ幸いです。個人、法人とも上記金額にかかわらずお受けいたします。

5. 寄附金の形式と寄附金の申込・振込方法

(1) 寄附金の申込方法：下記事務局まで電話または FAX でお問い合わせ下さい。

(2) 寄附金の払込方法：

郵便振込	郵便振替	01070-8-3807
銀行振込	三菱東京 UFJ 銀行聖護院支店	普通預金 口座番号 0000283
クレジット	円建て	http://hdbkyoto.jp/寄附のお願い/
	ドル建て	http://hdbkyoto.jp/en/donate-to-hdb-activities/

(3) 寄附金の形式：

(公財) 京都国際学生の家の寄附金として納入され、「(公財) 京都国際学生の家寄附金事務取扱規程」により、経理されます。

- 個人の場合：寄附金控除制度の「税額控除」または「所得控除」いずれかを選択し、減税効果を大きくすることが可能です。
- 法人の場合：「特定公益増進法人」への寄附として、一般寄附金の損金算入限度額とは別に、別枠の損金算入限度額が設けられています。免税措置の詳細については、下記でご確認ください。

(公財) 京都国際学生の家寄附金控除関連ページ <http://hdbkyoto.jp/> ご支援のお願い

6. 寄附に関するお問い合わせ先：(公財)京都国際学生の家寄附金事務局

事務局長 評議員 平野 克己 事務員 樋口 洋子

住所：〒606-8325 京都市左京区聖護院東町10番地 TEL：075-771-3648 FAX：075-771-3648

7. 募金委員会

委員長：吉村一良 (京都大学教授、OM) (OMとはOld Memberの略、HdBの元寮生のことです)

委員：岩崎隆二 (和晃技研代表取締役社長、OM)・上村多恵子 (京南倉庫代表取締役社長)・岡田明日馨 (寮生代表)・嘉田良平 (四條畷学園大学教授、OM)・カンタトーレ ドメニコ (株)モリス代表取締役、OM)・諏訪共香 (元大学講師)・永井千秋 (HdB 理事、OM)・平野克己 (HdB 評議員) 深海八郎 (HdB 理事)・楊方 (株)ニッシン 開発本部常務取締役、OM)・吉田和男 (京都産業大学教授、京大名誉教授)・ルスターホルツ アンドレアス (関西学院大学教授)

顧問：長尾 真 (京都大学名誉教授、元京都大学総長、元国立国会図書館長)

立石義雄 (京都商工会議所会頭、オムロン名誉会長)

後援：(五十音順)

明日の京都文化遺産プラットフォーム・京都仏教会・(公財) 基督教イーストアジアミッション (地権者)・留学生スタディ京都ネットワーク

2017年11月15日現在

支援のお願い（募金活動半年で企業から 20 万円の現実！）

平野 克己

（HdB 評議員、募金委員会事務局長）

YEAR BOOK の SPECIAL ISSUE Vol.41 で示された「研究者棟新築及び本館耐震・改修工事に向けて」は、2017 年 5 月の第 11 回理事会で最終決定され、同時に吉村委員長、嘉田事務局長中心に「募金委員会」が発足した。

活動は、実質 6 月から開始され、総工事費 2.5 億円の大半を募金でお願いすることとしてスタートした。まず、募金委員会の顧問として、京都大学元総長の長尾 真先生（京都大学名誉教授、元国立国会図書館長）に就任をお願いし、京都商工会議所の立石義雄会頭（オムロン株式会社名誉会長）にも就任頂いた。更に、後援として従来の基督教イーストアジアミッションの他に、京都仏教会、明日の京都文化遺産プラットホーム、留学生スタディ京都ネットワークにもご賛同いただき、体制としては京都の主要な組織が連なった形で開始された。

具体的には、6 月 13 日から京都市、京都府の関係先、京都商工会議所などを順次訪問し、種々のアドバイスを受けながらの募金活動を展開した。さらに、この窮状をマスコミ関係者にも訴え、京都新聞、中国新聞が取り上げ、HdB の経緯、耐震での苦境などを掲載して頂いた。

寄附の大半を期待する京都財界が加わる京都商工会議所には 6 月より数回足を運び、9 月 26 日の「常議員会」にて約 100 名の常議員に資料を渡すことができた。これを基に各企業に訪問活動を開始したが、電話の段階で門前払いや丁重なお断りなど、なかなか核心の担当者へ結び付けなかった。特に、会頭、副会頭の企業には大口を期待し、長尾顧問にご足労いただくなどして現在も継続してお願いしている。

しかし、企業からの寄附の申し込みは 12 月末時点で二社計 20 万円のみであり、この先の見通しも決して明るくない。今後の企業以外への展開へ具体的な企画、活動が必要であると痛感される。一方、個人の寄付に関しては、40 名 210 万円（募金総額 230 万円）に達した。今後、地元企業のみならず幅広く支援の呼びかけをして行くことが有効と思われるため、さらに多くの方に募金活動への参画をお願いしたい。

ここで、募金活動の実態であるが、募金委員として活動に動くメンバーは内海理事長を先頭に、嘉田、永井、深海各理事、平野評議員（9 月に事務局長）に加えて、新たに飯田 F、岡田寮生中心に寮生関係者と外部の諏訪さんと事務員の樋口さんのみであり、商工会議所の有力 30 社の対応だけでも四苦八苦しているのが現状で、種々の関係諸団体への重なる訪問など内海理事長などに負担をお掛けしている。

これから先の展望での期待されるのは、立石顧問のオムロンさんの規模が決定し、それに基づいて副会頭、有力企業へ再度お願いに動いて大口の寄附を獲得することで

あり、募金活動もそこに焦点を絞って注力したい。しかし、客観的に見て、企業が100万円以上を寄附することは非常にハードルが高く、かつ10社以上に期待するのも困難が予想されるため、大手企業以外への寄附活動の開始も急務となる。

現在、ホームページでの募金開始、クラウドファンディングの開始、各種ネットワークへのPR、有力寺院での募金箱の設置など準備を進めている。

しかし、根本的にはHdBの存在、活動意義、改修の必然性などを多くの市民、企業に認知していただくことが基本であり、そのためには、現在の活動家の倍以上のメンバーでないと対応不可能である。スタート以来、活動に賛同、参加されるメンバーは徐々に増えつつあるが、これからの事態を想定すると様々な分野で参加協力をお願いし、更にメンバーの増強が必要となる。

現在のHdBの理事、評議員などの役員、関係者、また、1000名に達するOMの方々の参加、学業多忙な中での寮生の部分的参加などもお願いしたい。但し、現在半分のOMしか連絡が取れていない状況であり、これを機会に連絡が取れていないOMに連絡をつけて、OM会を結成したいと考えている。

募金委員会としては、目標2.5億円必達で活動しているが、万一、目標に達しない場合の次善の策なども理事会では用意すべきであろう。

これまでの経過を見ると、HdBの関係者全員が危機感を持って対応することが最も重要であることが痛感させられる。50年の歴史の灯を継続させるために、今こそ関係者が当事者となって英知を集結して事態に対応し、危機を乗り越えたい。

因みに、既に準備金として0.3億円の積み立てを持つので、寄附の目標予定額は下記である。寄附者は銘板に刻み、本館玄関に永久に顕彰する計画である。

全額寄附金案 (2.2億円)

その内訳を大別すると

民間企業、団体等	: 1.45億円
個人・クラウド	: 0.3億円
HdB関係(卒寮生1000名)	: 0.3億円
その他	: 0.15億円

日本人と留学生が共生する留学生寮(HdB)

内海 博司

(HdB 理事長、京都大学名誉教授)

はじめに

テレビで留学生と日本人と一緒に生活する学生寮が某私大にできたことを、大きく取り上げていた。素晴らしいことだと思う。筆者が理事長をしている京都で最初の留学生寮である（公財）京都国際学生の家は、半世紀前から留学生と日本人学生と一緒に生活し国際平和に役立てようと地道な活動を続けている (<http://hdbkyoto.jp/>)。開館以来 50 年間に、寮生用 34 室を利用した寮生は世界の 81 ケ国から 973 名、併設されている研究者用 11 室を利用した学者、研究者は 94 ケ国から 2,992 名の多きにのぼる。そして設立 20 周年の年（1985）には、当学寮の地道な活動が認められ、国際交流基金より「国際交流奨励賞 地域交流振興賞」の第一回受賞団体として顕彰された。

しかし世間での本学寮の知名度は低い。湯浅八郎初代理事長（同志社大学名誉総長、国際基督教大学名誉総長）はじめ創設者達は、京都だけでなく〇〇「国際学生の家」が日本中に出来ることを願って、国際学生の家を「」に入れただけに非常に残念である。学寮の運営はボランティアでなりたっているだけに、学寮の宣伝をする余裕も無かった。財団法人から公益財団法人に移行後は、インターネットで「」が使えないので、「」が外れた（公財）京都国際学生の家が正式名で、（公財）京都「国際学生の家」は非公式名となっている。

筆者はこれまでに 3 度、本学寮で生活した体験を持つ。1 度目は 1 期生の日本人学生として（51 年前に 2 年間）、2 度目（約 41 年前に 2 年間）と 3 度目（29 年前に 3.5 年間）はハウスペアレント（住み込みアドバイザー）として留学生と寝起きを共にした。

財団法人 京都「国際学生の家」の理念

本学寮の設立の理念「共同の生」は現在も英文のままだが、「外国人学生と日本人学生とに提供する学寮という生活の場は、表層的な共存ではなく、異なる国家あるいは民族の間に厳然として存在する人種、宗教、慣習、文化さらにはイデオロギーといったものの相違を、寮生相互に対決（confront）させ、これらの相違を互いに認め合った上で、一個の人格としての「出会い（Begegnung）」を体験させる道場である。この「出会い」を通じて、相互の相違を認識し、相互に承認し合うという、きわめて厳しい努力と体験を通じて得られる寛容（Tolerance）が、人類普遍の願望である人類共存の道を達成する有力な手段である」という趣旨が記されている。

当然、「出会いの家（HdB: Haus der Begegnung）」と呼ぶべきだが、HdB は別称にな

っている。当時日本にも留学生寮は存在したが、留学生に宿舎を提供するだけで、日本人は入居できず、留学生寮を「国際的な人間教育の場」と位置づけて運営している宿舎はなかった。そこで HdB は在来の留学生寮とは質的に異なることを示すため、「家庭」に通じる「家」、つまり「国際学生の家」(Kyoto International Student House) という名称に決めたといわれている。

京都国際学生の家を支える「ソフト」と「ハード」

出来るだけ多くの国からの留学生に入居してもらうため、1ヶ国からは3人までという制限がつけられ、日本人学生だけは、全寮生の1/3 (約10人) が入居でき、学寮の公式言語は日本語と英語になっている。開寮当時は男性のみでしたが人類の半分は女性だからと約20年前から半数は女性となっている。

この「共同の生」を実現させる仕組みの要は「家庭」というキーワードである。特に親に相当するハウスペアレントはとても重要である。設立当初はスイス人と日本人の二組のハウスペアレント家族が居たが、35年後の2000年にスイスとの共同運営が解消され、現在は日本人家族だけが、ハウスペアレントとして、寮生の生活のアドバイス、勉強援助やカウンセリングなどに当たっている。このハウスペアレントを補佐する組織として、学生の入寮時の面接、カウンセリングなどを行う学寮運営委員会 (ハウスコミティー) という「ソフト」や、家庭では子ども達が日常生活の雑用を分担しているように、各寮生はハウスの日常生活を維持するために必要な雑用を分担する当番という「ソフト」 (例えば、セミナー当番、スポーツ当番、コモンミール当番など) がある。学寮の建物には、自然に学生同士が触れ合い「共同の生」に参加できるように、食事や音楽、スポーツ等を楽しめる「ハード」 (共有台所、ピアノ室、広い応接室、卓球室、ビリヤード室、庭には日本庭園、バレーボールコート等) を備えている。

特に、本学寮のユニークなソフトは「チーム」である。半期ごとに学生から選出されるチェアパーソン、バイスチェアパーソン、書記、会計、アドバイザーという5名の学生代表と、ハウスペアレントとで作る組織である。

このチームは開寮して半年ほどして、作られた。最初は共同生活の理念だけは存在したが (ルールは少ないほど良いと) 敢えて生活ルールは無かった。しかし、1ヶ月も経たないうちに30数名いる学生間で多くのトラブルが生じた。そこで当時寮生であった筆者が「学生の組織を作る必要がある」とハウスペアレントに直訴して大げんかになり寮は大混乱に陥った。当時は学生運動の盛んな時期で多くの大学寮が活動家の温床になっていた背景もあり、ハウスペアレントが一番懸念していた問題だったと思われる。留学生も含めた全寮生とハウスペアレントとの大激論の末、学生の代表とハウスペアレントが一緒になった「チーム」という組織を作ることになった。野球チームが監督も選手も一丸となって一つの目的に向かって活動するのをヒントにした命名であった。それから半世紀経つが「チーム」は非常に巧く機能しているソフトだと思っている。

年間行事に組み込まれた「ソフト」

今は、年間行事や日常生活に組み込まれた重要なソフトが多数ある。平均して月に2度ほど(初期では毎金曜日)、ハウスマザーとコモンミール当番の寮生達を作る各国料理と一緒に楽しむ夕食会(コモンミール)である。「食事」は、多様な地域の文化・慣習・宗教などを一番簡単に、しかも深く感じることのできる行為だと私たちは考えている。霊長類の中でヒトだけが食べ物を分けて食べ、更に頼まれもしない食べ物を買ってきて分ける(所謂お土産)という特性を持つ。「コモンミール」は、寮生達が互いに友好を深め、異なった国々の文化を理解する第一歩であり、「共同の生」の入り口と考えている。コモンミール後には、ハウスペアレントも含む全寮生によって、ハウスの一番重要な会議であるハウス・ミーティングが行なわれる。寮生のチェアパーソンを議長に、ハウスで起こる諸問題を取り上げ、全員で議論を闘わせ、解決への努力をしながら「共同の生」を具現化している。

年間行事として、前期と後期の始めに新入生歓迎会が行われ、寮の理事やハウスコミッティの委員が参加、本学寮の「共同の生」という生活に早く馴染めるよう、寮生の委員によるハウス活動のガイダンス、新入生の自己紹介等が行なわれる。前期には、「食」を通じた「地域住民との国際交流」と位置づけた「国際食べ物祭り」という行事もある。地域の人達をご招待して、各国のお国自慢の料理を提供して留学生達との触れ合いを行っている。後期には学寮をサポートしている方々や団体の方々をご招待して、各国のお国自慢の料理を作って感謝の気持ちを表す「感謝祭」という行事がある。学寮が多くの人達の善意で成立していることを、寮生自身に理解してもらう行事である。

その他、年に2度京都近隣に出かけて日本の文化、歴史や景観を体験する一泊二日の小旅行や、滞在している研究者や学者によるセミナー等が行われる。更に、寮生達の交流と親睦を兼ねたダンスパーティやスポーツ大会などが行われている。クリスマスの名を借りた寮生達の「忘年会」でもあるクリスマス・パーティは、学寮の役員、親しい友人やOM達を招待して、自慢の料理やケーキを作り、一緒に食事をし、余興など、一年を振り返りながら親睦を図る楽しい行事である。更に年に2度、クリーニング・デイ(大掃除)と称して、寮生全員で、自分たちの生活空間である学寮の共有スペースである卓球室、ビリヤード室、応接室、運動場、洗濯室などを自分たちで、清掃し、整理整頓にすること等も行っている。これらの活動の一部は京都市のサポートを受けている。

留学生を通じての国際交流をめざして

当学寮では、このような一年を通じたきめ細かい活動を通じ、留学生は日本人の親友を、日本人は留学生の親友を得る、結果として国際的なすばらし人間関係を創る場となっている。現在、日本には19万人以上もの留学生が来日しているが、彼らに単なる宿舎を提供するだけでは、日本にとっても留学生にとっても非常に残念である。明

治以降急速な近代化に成功し、古い慣習や文化も維持してきた不思議な国、日本に憧れ・日本を選び・学びにきた留学生達を、「国際的な人間教育の協力者」として位置づけ、日本の学生達との共同生活を通じて国際的理解と友愛を培い・深める「人間理解・人間形成の場」として、更には「国際平和を築く人材養成の場」として機能している留学生寮は、我が HdB だけだと自負している。

本学寮の役目はまだ終わってはいない

半世紀前の「東西対立」、「冷戦」、「ベトナム戦争」等に象徴される 1965 年に HdB は設立された。その後「ドイツ再統一」、「ソ連邦の解体」などで東西対立は終結し、アメリカの「一極支配」になるかとみえたが、「欧州連合 (EU)」及び「上海協力機構」の成立による「多極化」が進んでいる。しかし、9.11 のテロ、フランスの風刺週刊紙襲撃事件など、民族・宗教にまつわる対立が表面化し、「グローバル化」と「貧富の格差」が拡大して、刻々と我々を取り巻く国際社会は変化を続けている。最近の国際的流れはイギリスの EU 離脱、トランプ大統領の誕生に象徴されるように、自国優先主義やポピュリズム (大衆迎合主義) が台頭して、これまでのグローバル化の歴史を逆流させる動きをしている。最近では、オランダの総選挙やフランス大統領選で、ポピュリズムが抑えられたかのように見えるが予断は許せない。このような自国優先主義やポピュリズムは、急激なグローバル化とイラク戦争の後遺症、テロによって引き起こされた何十万という難民流入も大きい要因である。

それだけに、人種、文化、宗教等の多様性を尊重し、個人と個人との「出会い」を重視した「共同の生」のような平和共存を掲げて地道な活動を続けていく必要がある。この理想を掲げて半世紀の間、活動を続けてきた HdB の存在価値は、過去にもまして益々大きいと痛切に感じている。

そういう中で日本列島を襲う大地震に備えて建物の耐震診断を行った結果、残念なことに建築後 50 年も経つ建物ゆえに耐震補強が不可欠で、しかも研究者棟は改築の必要があると診断された。

そこで学寮内外の知恵を絞った結果、国内外の学生に「共同の生」を実現するための場を提供するという基本理念を維持しながら、新時代に相応しい新しい活動拠点となる建物として、本館の耐震補強・改修 (1.5 億円) 及び研究者棟の改築 (1 億円) に向けて努力 (募金活動) を現在続けている (<http://hdbkyoto.jp/> 寄附のお願い)。

参考資料

1. 内海博司：「留学生問題の問いかけているもの」明石書店発行「市民の目からみた国際化」pp31-37 (1989)
2. 内海博司：「学問の国際性と留学生問題」、放射線生物研究、24, 115-126 (1989).
3. 内海博司：「外国人留学生の宿舎支援と「共同の生」—留学生と日本人学生の交流は対等の立場で—」ウェブマガジン『留学交流』54,1-7(2015)

【ハウスにおける国際交流】

Ain't No Mountain High Enough

Adriana Hidding (HM), Yuya Iida (HF), Yoji (HC)

Almost two years have passed since we became house parents. The main topic during this period has and will be for some more time how to get the necessary anti-earthquake measures and repair works done.

The efforts to find funding happen outside the view of most residents. But I would like you all to know that Utsumi-sensei and the working group are doing their utmost best, and I would like to thank them for it. As it is not an easy task all residents, OM and other friends of the house are welcome to share their thoughts on the project, or offer assistance.

Important decisions about the future of the house need to be made. For the continuity of the house its furthermore important that as many former residents stay involved with the house as possible. It is our hope to not let the HdB community fall apart for those who leave the house. We hope to find ways to keep the encounter going, both online and in person.

Our biggest strength as house family during the past two years has been Yoji. He gives shine to house parents who can be a bit grumpy at times. And he has been the instigator of many encounters and laughs. He will get the necessary assistance in keeping his parents both occupied and happy. Between the time of writing and printing of this yearbook we hope to welcome a new house child. We are grateful for all who have lend a helping hand the past months. ーIt is very helpful now that part of the family is need of some extra rest.

Finally, some of the challenges for HdB seem difficult. However, we believe that with patience, practice and HdB's reason of being, "Coming together to learn from each other", we can get there.



「国際教育研究フォーラム」例会と情報交換 —同窓会と互啓会案—

村田 翼夫

(HdB 理事、Year Book 編集委員長、筑波大学名誉教授)

ハウスにおいて筆者が第1期生として生活していたころ、コモンミールやハウス・ミーティングはすでに実施されていた。ハウスは、設立されたばかりで、運営をいかにしていくか試行錯誤の面もあったので、ハウス・ミーティングやチームの話し合いは活発に行われた。ハウスに規則を制定するかどうかをチームで取り上げたとき、ペアレントと寮生代表が対立し大変だった。その話し合いを通してペアレント（コーラー先生、稲垣先生）の考え方や思想を理解することができた。また、ハウスの規則を制定するためにハウス・ミーティングでいろんなアイデアが出て、各メンバーの考え方を知るよい機会になった。特に、Mr. Jaime Schapiro が法学部学生で、細かい規則案を持ってきてそれが良いと言い張るので、出席者たちは閉口したことを覚えている。

2年目のツアーの時に、コーラー先生の提案で天理教の大教会、並びに奈良県笠間村における心境部落を訪問した。同部落は、原始共同体のような発想で所有物を部落民の共有にしていることに驚かされた。現在、どのようになっているか定かではない。当時、コーラー先生が得意そうにそれらの特色について説明されているのが印象的であった。

その他、外国を訪問した時にハウスの元寮生と再会して、彼等の生活状況や環境の情報を得たり、調査の手伝いをしてもらったりしたことも有り難かった。タイ・チェンマイ在住のパイブーン・スタspa氏は、京大農学研究科で修士号を取得した。彼に山地民の部落や小学校、農業研修センターなどを何度も案内してもらった。インドネシアのジャカルタを訪問した時にムルヨノ氏にお会いし、小中学校の案内やパンチャシラ（インドネシア五原則）教育の説明を受けた。シンガポールで会った程少文氏は、家族を紹介しつつ中国式の伝統的大家族生活、会社への通勤方法、高齢者対策不足などを説明してくれた。カナダのトロントではトンミン氏（ミャンマー出身）夫妻に会った。町の自然公園をガイドしてもらうとともに、彼が作成した電車駅の設計図を見せてもらった。その駅は実際に設立されていた。多民族社会のカナダにおける生活や業務において、ハウスの経験が大変役立ったとの話もあった。

こうしたハウスのハウス・ミーティング、コモン・ミール、ツアー、元寮生との再会などは、情報交換・情報確保にとって大変有難い機会である。

ハウスとの関連で、筆者が会長を引き受けている「国際教育研究フォーラム」例会の経験を紹介しつつ情報提供・交換の貴重な機会になっていることを指摘し、同時にハウスにおける情報提供・交換の方法について考察してみたい。

近年、「国際教育研究フォーラム」例会を年に3回程開催している。私が筑波大学を退職して大阪成蹊大学に勤務するため関西に移住して2年目の2005年に「国際教育協力開発研究会」を組織した。その頃は、例会を大阪成蹊大学や大阪大学で行うことが多かった。また、勤務先が京都女子大学に移ってから名称を現在のものに変更した。会場として、京都女子大学や関西大学で多く実施されるようになった。

数年前からご縁があって、外国でも例会を開催するようになった。2014年に中国の大連理工大学の外国語学院（外国語学部）から集中講義の要請があり、11月初旬に同大学を訪問し博士課程の院生に講義を行った。内容は、日本および東南アジアの教育・教育協力に関するものであった。そのことがきっかけで翌年（2015年）の6月には、大連理工大学の外国語学院の先生方3人が、京都女子大学で開催された6月の「国際教育研究フォーラム」春季例会に出席・発表された。そして、2016年5月27日～30日には、関西の大学の先生方8人が大連を訪問し、大連理工大学での同研究フォーラム・春季例会に出席し、また、大連外国語大学において先生方による講演を行った。さらに、昨年（2015年）の5月16日～18日には、大阪大学で同研究フォーラムを行い、大連理工大学から3人の先生、新たに台湾の国立嘉義大学教育学部の先生3人の参加があり発表もされた。この会は、発表が多く1日半の日程となった。11月には、国立嘉義大学から招へいがあり、同じく1日半の研究フォーラム（11月10日～11日）が開催された。日本から8人の研究者が参加した。中国の貴州省の中等教育の校長先生方2人も参加され、パネル・ディスカッションで発表された。また、9月2日には、タイのコンケン大学で「国際教育研究会」があり、私と明治学院大学の渋谷恵教授が出席発表した。

これらの外国で開催される研究フォーラムの例会や研究会に参加すると、研究発表内容を通して新しい知識を得ると同時に、現地の状況や背景に関する情報も得て知見を広めることができる。

例えば、大連理工大学では、研究発表がすべて日本語で行われた。中国の発表者5人はいずれも日本語に堪能であった。同大学は、理工系大学であるにもかかわらず、日本語専攻学生が通信教育学生も含めると2千人にも達していた。また、講演した大連外国語大学では、日本語が1番人気で、専攻学生は4千人以上いると聞いて驚いた。大連市では、日本語専攻の学生は、2万人以上おり、日本語のテレビもあるとのことだった。大連では、大学のみならず、お店に行った時も日本人に親切で親日的な雰囲気を感じる。中国で反日運動が高まった時にも、大連ではそうした運動は行われなかった。大連の街には、戦前に日本人によって設立された建物が今も使われている。外観が上野駅に似た大連駅、大連賓館（旧大和ホテル）、中国銀行（旧横浜正金銀行）、鉄路局（旧満鉄本社）、大連市人民政府（旧関東州庁）、旧日本人街などである。旧大和ホテルには、2階に夏目漱石が通ってコーヒーをよく飲んでいたという喫茶店が現在も開店しており、漱石が座っていたという席の上に漱石の写真が飾られていて懐かしく思った。

台湾の国立嘉義大学は、戦前に日本帝国が設立した嘉義農林学校と嘉義師範学校を統合して確立した大学である。嘉義農林学校は、戦前 1931 年に甲子園で行われた第 17 回全国中等学校野球大会に出場し、決勝戦まで進み中京商校と戦った。惜しくも敗れて準優勝校となった輝かしい記録を持つ。町の中心道路の交差点には、嘉義農林校の投手がボールを投げているポーズの大きな銅像が設置されていた。現在も、先生方や学生達



(大連理工大学外国語学院における「国際教育研究フォーラム」春季例会の様子、2016年6月28日)

は日本との交流を望んでいるようで、研究フォーラムに参加した院生に留学について聞いてみると、アメリカとともに日本の大学希望者が多かった。研究フォーラムにおいて「東アジアにおける小学校の国際教育の現状と未来」と題するパネル・ディスカッションが行われた。私は日本のケースを発表した。台湾の場合、近年、東南アジアのフィリピン、ベトナム、インドネシアなどの子ども達が小中学校に入学してきて対応に難儀しているとの報告があった。それらの国々の親で子どもを連れて働きに来ている労働者が急増している。日本と類似した状況で、外国人児童生徒の教育のあり方が問題になっている。その状況が理解できた。



(国立嘉義大学における「国際教育研究フォーラム」
秋季例会への参加者、2017年11月10日)

研究フォーラムを終えた翌日(11月12日)、観光で台南市へ行く途中に戦前に日本人技師が造ったという大きなダム(烏山頭水庫)を見学した。八田與一技師が10年の歳月をかけて完成したもので、嘉南平野の干ばつや水害を救い穀倉地帯に変えたと高く評価されている。その一帯は、八田與一記念公園となっており彼の銅像もあった。私たちが訪問した時に数10台の観光バスで見学に来た沢山の台湾の方々をお見掛けし、その人

気ぶりに感銘した。日本ではあまり知られていないが、台湾では教科書にも取り上げられ、台湾の90%の人々は知っているとのことであった。

コンケン大学の教育学部における国際教育研究会は、昨年(2017年)の9月2日に開催された。私は、“The Current Integration Situation of Small-Scale Schools in Kyoto, Japan (京都における小規模小学校の統合状況)”と題する発表を行った。特に、美山市の村および京都市の都市における小学校の統合状況を説明した。その発表を聞いたタイ人聴衆から意見があり、タイでも小規模校が多く統合は課題になっているが、既存の小学校と統合後の小学校が遠く離れていて通学が容易ではないことが明らかにされた。日本のようなスクールバスの提供は、財政的に困難ということであった。



(コンケン大学教育学部における国際教育研究会の様子、2017年9月2日)

見があり、タイでも小規模校が多く統合は課題になっているが、既存の小学校と統合後の小学校が遠く離れていて通学が容易ではないことが明らかにされた。日本のようなスクールバスの提供は、財政的に困難ということであった。

その他、タイ人およびラオス人の発表者には、教育工学関係のものが多かった。それは主催者であるスマリー先生の影響によるものであった。スマリー先生 (Dr. Sumaree Chaijaroen) は、筑波大学

教育学研究科で博士号(教育工学)を取得されている。彼女は学生の間で大変な人気で、博士課程に指導学生が23人、修士課程に12人もいるということであった。彼女は大学院科長も務めていていつも忙しそうなのだが、そのように多数の院生をどのように指導しているのか、興味深いテーマである。

研究会終了後に教育学部長のマイトリー先生 (Dr. Maitree Inprasitha 筑波大学で博士号取得、数学教育専攻) に会ったところ、昨年(2017年)の7月に完成したという教育方法の研究・研修センターに案内された。その正式名称は、“Institute for Research and Development on Teaching Profession for ASEAN (IRDTP)” である。タイ、マレーシアやインドネシアなどの国際学力テスト (PISA, TIMSS) の成績が芳しくないことを反省し、タイのみならず ASEAN 諸国が協力して教育方法の改善と学力の向上を図ろうとする研究・研修センターである。タイや ASEAN 諸国の教員に対する研修も主な目的としている。タイでは、マイトリー先生の尽力によりコンケン大学に初めて



(コンケン大学における新しい教育方法研究・研修センタービル、2017年9月2日)

創設された。その 1 室に筑波大学 CRICED（国際教育協力開発研究センター）Office も設置されていて感銘を覚えた。CRICED は私が初代センター長を務めたところなので、Office のセンター長席に座り記念撮影をしてもらった。

以上、述べたことから、「国際教育研究フォーラム」や「国際教育研究会」に参加することにより、発表内容については言うまでもなく、参加者の説明、会場関係や周りの環境に関する情報を通して知見を広めることが理解できよう。大連では、中国に反日的な都市ばかりでなく親日的都市もあることを知った。台湾の嘉義市では、最近、東南

アジア諸国からの出稼ぎ労働者の親とともに訪台して台湾の学校に入学する児童が増加しているという情報を得た。タイのコンケンでも小規模小学校の統合が迫られているが、通学が困難な状況にあり日本ほど実現していないことが分かった。また、コンケン大学が ASEAN 教員の研修を行う教育方法の研修センターが創設されたことも知りえた。

ハウスには、いろんな国の留学生が共生している。しかも、研究フォーラムや研究会のような 1 日や 4～5 日というのではなく 1～2 年滞在する寮生として共同生活を送っている。日本人学生、外国人留学生が共同生活におけるコミュニケーションにより、各種の情報交換を行えることは明らかである。前述のようにハウス・ミーティング、コモンミール、ツアーなどの行事を通して相互の情報交換は行われているであろう。ハウスで友人となり、将来、留学生が帰った本国を訪問しその国のいろんな状況、環境、伝統文化について情報・知識を得る機会もあり得るであろう。しかし、積極的な情報提供・情報交換を図ろうとすれば、ある程度の工夫も必要ではなからうか。私が、評議員をしている京都の「海の星学寮」（民間寮）では、以前から同窓会は結成されていた。公益財団法人として認められた後、同窓生による「公開講演会」（一般対象、年 1 回）や「懇話会」（寮生対象、年 2 回）が組織され、加えて、寮生による「互啓会」が実施されてきた。「互啓会」は、寮生たちが交代で自分の専門や趣味・興味を持つことなどについて寮生に対し発表する会である。原則的に寮生全員（約 30 人）が分担する。発表時間は、質疑を入れて約 40～60 分である。寮生以外の同窓生も参加してよいことになっている。私も何度か聴講させてもらった。印象に残っているのは、「太陽の黒点活動」、「EC ビジネスについて、amazon と楽天」、「超電動マグネット」、「ビットコイン」、「機械と命のあいだ」、「就活の経験から」などである。同学寮には留学生はいないが、ハウスには多くの留学生がいるので彼らの専門領域、自国の伝統文化、貴重な経験などの話をきければ素晴らしい情報提供・情報交換の機会になるのではなからうか。そのような「懇話会」や「互啓会」の経験があれば、将来、新しい国際フォーラムの結成や参加者の母国での同フォーラム開催に発展するかもしれない。ハウスでは 1999 年に同窓会が結成されているが、その後ほとんど活動を行っていないようなので、これから公開講演会、懇話会などのプログラムを展開してはどうだろうか。さらに寮生による互啓会を開催すれば、情報提供・情報交換のためばかりでなく友好親善の深まりにとっても有意義であろう。その実現を期待するものである。

留学生の大学選びと THE 世界大学ランキング日本版

内海 博司

(HdB 理事長、京都大学名誉教授)

はじめに

最近、イギリスの教育専門誌タイムズ・ハイヤー・エデュケーション (THE : Times Higher Education) の「THE 世界大学ランキング」(以下、世界ランキング) についての講演会に出席する機会をえた。そのランキングで日本の大学が 100 番以内にランクインしているのは東京大学と京都大学しかないというニュースは聞いたことがあるが、どのような基準でランキングしているのかは知らなかった。最近「THE 世界大学ランキング日本版」(以下、日本版) ができたこともあり、それを運営する会社の方が講演者であった。

世界の大学ランキングについて

世界の大学ランキングには 3 種あり、イギリスの THE によるランキングと、同じくイギリスのグローバル高等教育評価機関であるクアクアレリ・シモンズ (QS : Quacquarelli Symonds) による「QS 世界大学ランキング」及び上海交通大学研究センターによる「世界大学学術ランキング (ARWU : The Academic Ranking of World Universities)」があることを知った。

世界ランキングは、2004 年から公開されている世界的な大学ランキングであり、教育力、研究力、研究の影響力 (論文の引用数)、国際性、産業界からの収入の 5 領域、13 指標についてのデータを収集し、総合力を評価、分析したうえで世界の大学をランキング化している。2018 年度版では、世界 77 か国の大学のうち上位 1,000 大学を発表し、調査対象大学数が 1,000 を越えたそうである。日本は 100 位以内にはたった 2 校しか入っていない。しかし 1,102 大学内にランクインした日本の大学数は 89 校あり、この数は世界第 3 位である。全世界には約 20,000 の高等教育機関があるので、日本の高等教育の質の高さはあると思われる。因みに 1 位のアメリカは 157 校、2 位のイギリスは 93 校、4 位の中国が 63 校である。

QS 世界大学ランキングは、世界の 965 大学を対象に「研究者からの評価 (40%)」「企業による評判 (10%)」「学生 1 人あたりの教員数 (20%)」「教員 1 人あたりの論文引用数 (20%)」「外国人教員比率 (5%)・留学生比率 (5%)」を基準に評価している。

ARWU 世界大学学術ランキングは、ノーベル賞やフィールズ賞を受賞した卒業生の換算数、同 2 つの賞を受賞した教員の数、高被引用論文著者、「ネイチャー (Nature)」と「サイエンス (Science)」に発表された論文数、「Science Citation Index (SCI)」

および「Social Sciences Citation Index (SSIE)」に収録された論文数など、6つの指標に基づきトップ500大学を選出しているそうである。

これらの世界的な大学ランキングはいずれも評価基準や領域・指標ごとの比重などが異なるが、どのランキングでも、「研究力」つまり大学院の研究力を中心にランキングをしている。日本の工学・農学のレベルは世界的な視野で見ても高いのだが、一般的に「国際性」と「論文被引用率」の分野が低いと言われている。特に英語による論文被引用数が参照されるので、人文系の場合は多くが日本語の研究論文ですから、英語圏の大学に比べ評価が低くなるのは当然である。海外留学生や外国籍教員数の割合も、日本の大学は日本の学生や教職員で構成されているので、海外大学に比べると当然低くなる。

国際的な大学ランキングの問題点

「論文被引用率」であるSCIやSSIEは論文の価値を測る重要な要素の1つであることは間違いない。しかし、あまりにも重んじられるのも問題である。近年、大学人事での偏りとか、有名大学での不正論文が取りざたされるのも、このような論文被引用率を重んじ過ぎることによる弊害と思われる。ある学問分野のジャーナルの引用件数は、その分野の研究者数に比例するため、生命科学のような裾野の広い分野の論文被引用率が高くなるのは当然だが、教育に不可欠な研究分野の研究者の論文被引用率が低いというだけで他分野の研究者で置き換わっていく傾向にあるのは、大学本来の使命からすると非常に懸念すべきことである。

世界ランキングの評価では、「教育」(30%)「研究」(30%)「被引用論文」(30%)「国際性」(7.5%)「産業界からの収入」(2.5%)と5分野である。かつて京都大学図書館の商議員を務めた頃、世界のジャーナルを独占しているエルゼビア社と対決した経験がある筆者としては、気になることがある。この世界ランキングの評価分野で研究の学術生産性(6%)、被引用論文(30%)の指標計算に使われているデータベースが、全てエルゼビア社に登録されている学術雑誌が使われていることである。研究者の多くがエルゼビア社の科学ジャーナルの独占化に反発して、インターネットを用いた電子ジャーナルを立ち上げた経緯がある。最近では、電子ジャーナルに発表された研究論文も高く評価され影響力を持ちつつある。将来、エルゼビア社のデータを基礎とする世界大学ランキングは、現実の大学の研究力との乖離が生まれると思われる。

世界ランキングの1位はオックスフォード大学(英国)、2位はケンブリッジ大学(英国)、3位はスタンフォード大学(米国)とカリフォルニア工科大学(米国)で、トップ10はほぼ英米の大学で占められている。但し、同じアジア圏でも日本の東京大学よりシンガポール国立大学や北京大学などが上位にランクされている。学問自体は本来グローバルのものでですから、日本の大学がグローバル化に乗り遅れているといわれても仕方が無い。

文科省は「スーパーグローバル大学創成支援事業」を展開し、旧帝大系など13大学を、世界100位以内を目指す「トップ型」に指定して、重点的に予算を配分している。

しかし、ここ数年の世界ランキングの順位の変動をみても、あまり大きな成果が得られているとは思えない。国立大学の主要財源である運営費交付金は年々削減され続け、私立大学への私学助成も減少している。大学教育全体の予算を削り、一部の大学に少しだけ財源を上乗せする現在の政府の大学政策では、日本の大学の世界ランキングの低迷は続くと思われる。最近、日本の科学者のノーベル賞が話題になるが、それは過去の遺産であり現在のように「社会に役立つ学術を重視し、基礎科学をおろそかにする」ような政策を続け、大学予算の削減を続けていけば、ノーベル賞の話題さえもされない日本の学術研究の衰退が起きる恐れがある。

我々のように留学生と関わる活動をしていると、将来優秀な留学生が日本を目指してくれないのではないかと懸念している。更に悪いことには、学生定員を満たせていない大学が、留学生を教育するに十分な体制のないまま留学生を受け入れているのは、日本の大学の評判を落とすだけだと心配をしている。最近、テレビで問題になったアルバイトをすることを前提に生徒を集めているような金儲け主義の日本語学校が乱立していることは、憂うべき事態と思われる。更に人手不足に悩んでいるサービス業界が、ほどよい労働者として彼らを雇っている実態もあり、外国人労働者を受け入れる法律の整備をして、本当に日本で勉強したいと思って来日した若者の夢を打ち砕くことになる似非学校を排除する法整備をすることが必要だと思われる。

THE 世界大学ランキング日本版

日本では長らく入試難易度、いわゆる偏差値が高校生の大学選び、また企業の採用にも影響を与えてきた。しかし近年は、入学した学生をどれだけ成長させて社会に送り出すか、つまり入学後の教育力が、高校生や保護者、社会から注目されている。世界レベルの大学の評価法は、「偏差値」や「就職力」といった指標とは少し差が見られる。そこで登場したのが日本版で「研究力」より「教育力」を重視したランキングだそうである。

日本版の評価は、「教育リソース」(38%)「教育満足度」(26%)「教育成果」(20%)「国際性」(16%)という4分野と11指標とで構成され、大学の教育力を総合的にランキングしているそうである。

各指標は、学生数などの大学入力情報、競争的資金の獲得数などの引用情報、高校の教員・高等教育機関研究者・企業の人事担当者からの評判調査情報をもとに算出されているそうである。「教育リソース」は、どれだけ充実した教育が行われている可能性があるかを、学生一人あたりの資金(10%)学生一人あたりの教員数(8%)大学合格者の学力(6%)教員一人あたりの競争的資金¹獲得数(7%)で測定されている。「教育満足度」は、どれだけ教育への期待が実現されているかで、2指標で構成され、全体の26%を占める。その指標とは高校教員の評判調査²によるグローバル人材育成の重視(13%)と入学後の能力伸長(13%)で構成されている。「教育成果」は、どれだけ卒業生が活躍しているかで2指標で構成され全体の20%を占める。その指標とは、企業人事の評判調査³(7%)、研究者の評判調査⁴(13%)である。「国

際性」は、どれだけ国際的な教育環境になっているかで、2指標で構成され、全体の16%を占め、外国人学生比率（8%）と外国人教員比率（8%）である。この国際性に関しては、各大学での改革が急速に進められており、グローバル化への対応度合いが端的に表れる指標と思われる。

このように日本版のランキングは、世界ランキングとは異なる特徴がある。例えば、国際基督教大学（15位）、国際教養大学（20位）のようになりベラルアーツカレッジ、お茶の水女子大学（39位）や福岡女子大学（48位）などの女子大がランクインしている。また研究力を重視した世界ランキングでは、理工系の学部を持つ大学のランクインが目立つが、日本版は文理のバランスが取られ一橋大学（14位）や神田外語大学（46位）のような人文社会系の単科大学もランクインしている。

そういう意味で、大学を「多面的・総合的」に選ぶ新しい良い指標になると思われる。偏差値以外にどんな視点で大学を見ればいいかわからない生徒や父兄にとっては、指標の4分野11項目そのものが大学を選択する指標になると思われる。これの高校現場での利用としては、既に志望校が定まっている生徒にとっては、その大学がランキングに入っていれば、特徴を再確認するのに役立つし、分野別のスコアはどんな分野が優れているのかを知り、大学への理解を深められるのに役立つと思われる。複数の候補の中から第1志望校や併願校をどこにするか迷っている生徒にとっては、ランクインしているかどうか判断材料の一つになるかもしれない。一方、まだ志望校が見つかっていない生徒にとっては、気になる大学を見つけるきっかけになると思われる。日本版が高校生の大学選びに使われるようになれば、偏差値一辺倒の時代から、多面的・総合的に大学を評価する時代が変わっていく可能性も生まれるであろう。更に大学自体はその評価法を理解して、よりよい学生を獲得するために、自分の大学のランキングを挙げる努力を検討する資料にもなると思われる。

また、世界の学生達が留学先を選ぼうと、Times Higher Education のホームページ（<https://www.timeshighereducation.com/world-university-rankings>）を開くと、Japan University Ranking と出てくるので、日本の大学を留学先として選ぶ情報として、大いに役立つと思われる。日本留学への情報を流している Japan Study Support (Information for international students) は2017年度に年間サイト訪問者数が100万人を超えたそうで、世界の若者達にとって日本への関心は大いにあると思われる。それだけに日本の大学は、単なる学生数の穴埋めに留学生を受け入れようとするのではなく、大学教科の国際対応だけではなく、日本に来た留学生が快適な学生生活を送れるような環境（奨学金、生活支援）、特に宿舍の充実を行うことは非常に大切だと思われる。

我が留学生寮「(公財)京都国際学生の家」は、約半世紀前に民間の力によって、それもスイスと日本の民間人による国際協力によって、京都で最初の留学生寮として設立された。また、別称を「出会いの家 (Haus der Begegnung, HdB)」と呼ばれるが、日本で最初の留学生と日本人学生が対等の立場で「混住」し、しかも単なる「混住」

型の留学生寮でなく、世界平和を指向する「国際的共生」型の留学生寮である（巻頭言、1 ページ参照）。更に、その特徴ある理念（Principle and Purpose、表紙裏参照）と運営の仕組み（日本人と留学生が共生する留学生寮 HdB、11 ページ参照）をもっている留学生寮である。

ぜひ多くの大学関係者に我が寮のことを知って頂き、活用して欲しいと思っている。

参考資料

1. 内閣府ホームページ「競争的資金制度」に掲載のある「平成 27 年度の制度一覧」のうち、文部科学省が主管している競争的資金制度を対象。
2. （株）ベネッセコーポレーションが高等学校の進路担当教員を対象に「大学に関する印象調査」を実施。
3. （株）日経 HR による「企業の人事担当者から見た大学のイメージ調査」。卒業生の活躍を多面的に評価。
4. 「THE 世界大学ランキング」において高等教育機関研究者を対象に「教育力の高い大学」を調査。



ある日のコモンミールの様子 in HdB

50年ぶりの「留学生」との関わり

平野 克己

(HdB 評議員、募金委員会・事務局長)

50年ぶりというのは、1962年に大学入学後約2年間、京大「留学生友の会」という学生サークルで関わって以来ということで、もう半世紀以上の記憶になるが、主に東南アジアからの留学生の下宿、生活、不平不満などの聞き役として様々な国の方々とお付き合いし、時には朝まで議論したこともあった。

その後 HdB という寮の話を目にしてはいたが、社会人になって大学からは足が遠ざかっていた。しかし、かつての学生サークルの仲間であった内海理事長、深海理事などが、耐震化対策の活動で苦慮しているとの情報に接し、数年前から留学生問題について「50年後の関わり」となった。

「外部から HdB に関わった理由」

この関わりの動機としては、単なる苦境への同情などの感情だけでなく、HdB の精神、理念に共感したからに他ならない。日本人が国際化するため、今こそ、また今からも必要なものは、人間同士の相互理解であることを、70年の人生から痛感してきた。

学生時代は日本人の間でも人生観の違いがあるから、まして外国人の間で考え方に違いがあり摩擦が生じて当然と思っていた。

しかし、社会人として海外に100回以上足を運び、多種多様な方々と接するにつれ、日本人そのものの特質、また自分自身を理解できるようになった。日本に住んでいて、ごく当たり前としていた、考え方、感情などがグローバル化していく中で通用しない現実に直面し、日本人が国際人になる必要性を痛感し、HdB 改築の中でいくらかでも貢献できればとの思いで参画した。

大文字 今再びの 青春に

「民間で感じた日本人の国際化の必要性」

一般的に日本人が海外に出て恥をかく要因は大きく3点にまとめられる。先ず第1点は、外国に対する無知、第2点は個性がなく自己主張できない、第3点は通訳がないと通用しないことで、勿論、それらを持ち備えた日本人も増えてきているが、50代以上の多くが世界各地で経験していると思う。

これらは、学校教育、家庭教育などで形成されるべき問題であるが、現実にはほとんど教育されておらず、民間会社にては入社後に一から教育を始めるが簡単には身につかない。その中で HdB の理念と生活実感の経験を聞くにつれ、留学生にとってより

も日本人に取り、HdB は必要であるとの認識を強くした。

外国での無知での実例として、一昨年中国の北京で中国政府の主催する会議に出席した際、同行者が地下鉄の荷物検査の装置を写真撮影して公安に捕まった。幸い当方は中国語ができたので、引き取りできたが、日本の団体の長でも中国の事情はほとんど理解していない。日本と違う政治形態、宗教などの国に行くときは、それなりの情報を勉強しておくのは常識であるが。

第2点の個性の無さは、ビジネスなどでの会議などは無難にこなすが、パーティーなどでは話題から取り残される。日本の飲み会などでの話題と世界の懇親会などでの話題は全く異なるため、日本人だけ取り残されるケースが多々ある。外国人から見ると、同じ能面を被った人形に見えるらしい。中東など軍事問題が起こると、その原因などには一切触れず、原油が上がる、経済危機だなど日本の都合のことしか話題にしない民間人を見てて寂しい思いをした。エコノミックアニマルと揶揄されても仕方がないと思った。

第3点の語学の問題は、半世紀前から英語教育の課題として取り上げられているが、未だに会話するためには海外留学、駐在しないと対応できないと言われる。会話だけなら、何も英語に拘らなくてもアクセントの少ないイタリア語、韓国語など日本人が聞きやすい言語の教育も有効かと思う。

もっとも、中には、言葉が喋れなくても世界中を一人歩き回る者、日本語以外は一切話さず常に通訳を連れ歩く経営者、どんな国に行っても日本自慢する猛者など例外的な者もいるが、グローバル対応ができる国際人には程遠い。

「HdB の理念を京都、日本へ伝える使命」

私には H dB での生活の経験はないので理念は実感していないが、異なる国、民族、文化、宗教などが相互理解するために、HdB の違う国の多くの方々と接触できる場、また、食事などを通してより深くコミュニケーションを交わせる場は非常に恵まれている。その HdB が耐震での建て替えから存続の危機ということは、もし困難に陥ったならば日本人の国際化が遅れることでもあり、日本の将来の危機とも受け取っている。そのため HdB は絶対に存続させるとの思いで募金活動に参画しているが、募金活動を通して HdB の理念、精神を京都、日本の方々に少しでも理解してもらうことが更に重要と思う。また、この精神に共感、理解する日本人は多数いると信じる。

冬冷えも コモンミールの温かさ

「募金活動の更なる拡大のために」

昨年6月から実質的な募金活動が開始され、京都の行政、経済界、仏教会などを一通り訪問して寄附をお願いしている。残念ながら寄附はほとんどこれからの状況であり、今後更なる方策に取り組む必要がある。従来の有力企業の訪問だけでは限界があり、百万人の京都市民、1億人の日本人全体への呼びかけをし、その中から賛同を求

めて行く地道な活動の必要性を痛感しました。一例として、京都の組織である「留学生スタディ京都ネットワーク」には留学生関係者が集まり、研修会などの実質組活動がスタートしたので、HdB とのネットワークを広げる募金活動に参画して頂けるチャンスともいえる。現在、京都への観光客は増加の一途にあるのを追い風に、この募金活動での HdB の精神理念の訴えは、京都、日本のみならず、全世界へも展開していけたら幸いである。そのためには、情報伝達方法として、個別訪問、文書手渡しでは限界があり、ツイッター、フェイスブックなどのネットでの情報伝達手段を活用しての展開が急務である。特にネット依存度は若年層ほど強まっており、意外な展開も期待される。こうした背景の中で、HdB の募金委員会の活動もネットを活用して全世界にその理念、思想、実績を訴えるのは参加当事者の責任であり、また実際長期的に見て意味があることと思える。

梅一輪 夢は世界を駆け巡る

「OM の方々の募金活動への参画を」

現在、HdB では在寮生の OM が 1000 名近くに達するが、当事者である方々に募金活動に参画して頂くことは一般的には当然と思われる。どんな動物でも自分が育った巣と同じ巣を作って子育てし子孫を継続させる。ここを巣立った方々は、必ず心の片隅で、世界の中で人間交流の大切さを実感されてきたと思う。これからの世界平和への人材を育成する HdB の存続を強くバックアップしてもらうために、現在半数しか連絡が取れない状況を何とか打開して、一人でも多くのネットワークを作るために SNS を活用して呼びかけてもらいたい。募金金額もさることながら、消極的であっても募金活動参加者が増えることの方が重要と思える。

学び舎に植えし蜜柑が 満開に

「HdB の今後の継続のための新たな視点」

数年前から HdB の建物を訪れるようになって、この建物が 50 年間良く維持できたと感心している。逆に、建物、設備などは年々新しい機能の商品が登場する中で、当初とほぼ同一のままというのは、当初の建築が素晴らしかったせいもあるが、住む人を思いやり、住居を快適にという心が欠けていたのではという気がする。日本、京都には古い文化を大切にすると新しい物を取り入れる進取の精神が同居している長所がある。HdB にとって何が進取の対象となるかは人の判断で異なるが、少なくとも常に居住者の意見を聞き、その中から順次実施するようにしたいものだ。未来志向で常に快適な生活環境を指向することは学生にとっても贅沢とは言えない。

雪の朝 静寂（しじま）に眠る 聖護院

「自分自身を納得させ行動」

最後に、半世紀前に私が潜在的に持っていた東南アジアに対する優越感、差別意識は、数年前フランスで感じた全く逆の彼らの日本人に対する優越感、差別意識など同様に、相対的、一時的な先入観主体のものであり

、人間同士の交流で消え去るものであると強く感じた。そのような訓練の場が若い時に体験できるのが HdB であろう。HdB の理念、精神を日本全国に伝えることが募金委員会での使命でもあるとの思いで職責を全うしたい。

陽だまりを求めて遊ぶ 寒雀

HdB とボーイスカウトとの関係 ー地域コミュニティ活性化と国際交流ー

鈴木 松郎
(1966年入寮)

昨年までの HdB 利用者は、約 50 年間に学生（レジデント）81 カ国 989 名、学者・研究者（スカラー）95 カ国、3020 名と多大な実績を有しています。人種、文化、宗教等の多様性を尊重し、「邂逅・出会い」を重視して 留学生と日本人学生が共同生活し、さらにハウスペアレント（住込み管理人）が学生と一緒に住み、共同生活を支援する体制など HdB の存在価値は高いものです。今後 日本では 国際交流が進み、外国からの留学生・研究生が増え続けると思われ、HdB は価値ある留学生寮として欠かせないものでしょう。

HdB の震災対策

京都には M7 クラスの直下型断層地震を引き起こす断層が大量に存在します（花折断層帯、桃山―鹿ヶ谷断層、黄檗断層、西山断層帯など）。いずれも 30 年以内に地震が発生する可能性は約 0%~5%と低いと見なされているようですが、活断層が海溝型地震などの巨大地震に誘発されて活動する可能性もあります。これまで阪神・淡路大震災、東日本大震災、そして近年では熊本大震災など想定外の地震が発生しています。また 東南海トラフ地震の発生する確率は 30 年以内に 70%と高く、京都でも直下型断層地震が誘発される可能性もあります。これらの地震に備えて、HdB でもさらに耐震補強をしておく必要があります。耐震性を増強することにより HdB は存続出来、地域住民の避難場所としての活用も可能となります。

HdB と地域コミュニティとの仲介役：ボーイスカウト

HdB の存在は地域コミュニティの国際化・活性化にも役立つと思います。もともと HdB の所在地（聖護院東町）には、スイス東アジアミッション（SOAM）の施設がありました。（学生の寄宿舎も併設されていた。）そして SOAM 宣教師のコーラ博士と同志社大学神学生の内田伊三雄氏との出会いを契機として、1961 年にボーイスカウト（BS）京都第 42 団が創設されました。【初代隊長：内田氏、初代副長：立脇氏（現北原氏）、初代団委員：稲垣先生（HdB 初代理事長）】また内田氏と京大ローバー先輩の杉村氏との約束で、京大ローバーから立脇、緒方、平岡、鈴木、坂野、井下が順次にリーダーとして派遣され、1965 年に HdB が創設されてから、これらのメンバーも HdB レジデントとなりました。（大学生年齢のスカウトはローバースカウトと呼ばれ、京大

ローバーとは京都第36団ローバースカウト隊の呼称です。) また内田氏は1969~1971にHdBのハウスファーター(HF)も勤められました。

当時BS42団では育成会、団委員会の実体がなく、ほとんどSOAMの寄付金で運営されていました。そこで私の後任としてBS42団のリーダーとなった坂野氏がカブスカウト(小2年~小5年の幼少スカウト)を集め、カブ隊を結成し、ご父兄の協力を得て、実態のある育成会、団委員会を再編し、BS42団は自立運営できる地域密着のBS団組織となりました。その後BS42団は地元のスカウトが地元のリーダーの指導のもとで活動し、現在は京都「国際学生の家」を本拠として連盟に登録し、全5部門(ビーバー隊、カブ隊、ボーイ隊、ベンチャー隊、ローバー隊)を揃えるまで成長し、吉田山山頂広場を拠点としてスカウト活動を展開しています。

これまでBS42団はHdBとはただ倉庫を借りているだけの関係だったようですが、近年HdBの一室をBS42団の拠点とし団運営会議やスカウト集いに活用しているようです。またHdBの“国際食べ祭り”に多数の42団関係者が参加し、吉田山でのBS国際大会にHdB関係者が招待されるなど、相互交流が活発になっているようです。HdBのレジデントやスカラーにもスカウト経験者がいるのではないのでしょうか?HdBメンバーがBS42団のリーダーとして参画すれば、一層親密な交流が出来、地域青少年の育成や国際交流の手助けなど、地域活性化に役立つものと思います。今後ともHdBとBS42団との親密な交流を継続することを期待します。

(BS42団ホームページ <http://www.geocities.jp/scoutkyoto42/> を参照して下さい)

また近辺の京都連盟北星地区には42団のほか19団(北大路)、24団(岡崎)、36団(京大)、43団(同志社大)、47団(北白川)、68団(下鴨)、72団(岩倉)など多くのBS団があり、これらのスカウトとの国際交流も出来れば良いと思います。

ボーイスカウト活動は、世界169の国と地域、約4,000万人が加盟する世界最大の青少年運動です。野外活動などを通じ、青少年の優れた人格を形成し、かつ国際友愛精神の増進を図り、青少年の健全育成に寄与することがボーイスカウト日本連盟の目的であり、世界平和にも貢献するものと思います。特にジャンボリー(ボーイスカウトの大会)では、地域内外、国内外、異文化、異宗教のスカウトが同時・同場所にキャンプ生活をして、友好関係を築くなど、ボーイスカウトの精神はHdBの趣旨・目的とも相通じると思われます。

世界ジャンボリー(WSJ)は4年に1度開催されています。日本では1971年に第13回WSJが朝霧高原(静岡)で、2015年には第23回WSJがきらら浜(山口)で開催されました。第23回WSJは12日(7月28日から8月8日)に渡り、全世界(世界スカウト機構加盟国から152の国と地域)から3万人以上が参加し、日帰り参観者(デイビジター)はのべ1万人以上となりました。私もデイビジターに加わり、ノルウェーの背の高いスカウトに会場内を案内してもらいました。



第23回世界ジャンボリー (2015年7月)

私は約50年前にHdBを退寮し、大学院修士課程を修了後、京都を離れました。その後、化学工業会社の一企業戦士として勤め上げ、定年退職後、現在は大阪・岸和田市に定住し、地域などのボランティア活動に勤しんでいます。そしてHdBやボーイスカウトの情報を伺い、やがて皆さんが、地域、国、世界で活躍し、世界平和に貢献されるものと期待しております。

弥栄 (いやさか) *

*弥栄 (いやさか、いやさかえ、やさかえ、やさか、やえい) とは、主に一層、栄えるという意味の単語。また、「万歳」に意味が近く、めでたい意味で使われることもある。ボーイスカウトでは、活動において荣誉にあずかったスカウトに対し、セレモニーの場において「弥栄、弥栄、弥栄」とエールを掛けて讃える。(出典：ウィキペディアより)

京都国際学生の家 募金活動所感

永井 千秋

(1971年入寮、HdB理事、募金委員)

学生の家今回の募金活動は緒についたばかりであり、私も募金委員会の委員を拝命している。委員を承諾したのは、他の方にはない経験が小生にあり、お手伝い出来たらと思ったせいである。

小生 OM (1971年入寮) であるが、1995年1月17日に発生した阪神大震災に際し、被災地域の創造的復興を支援する財団法人設立のため募金活動等を行った経験があり、その経験を今回に生かせればと思った次第である。

当時、現在のように産学連携は少なく、大学と産業界は別々に貢献すれば良い、「学」と「産」が共同で何かをする必要はないという考えが主流であった。また、時代の先進的なコンセプト（今でいえば AI 技術か）を共同で研究して産業振興に生かそうという考えもなかった。しかし、「学」や「産」単独では大イノベーションには至らないという意識も少し芽生えていた。そこで、「官」でもなく「学」でもなく「産」でもない組織を設立し、時代が要請する喫緊の課題（大震災からの創造的復興）に対応しようとしたのが、小生の経験した財団設立募金活動をであった。（あくまで私見であるが）

構想は川崎重工業大庭社長が貝原兵庫県知事（何れも当時）に提案したもの（新産業を興す研究所の設立）が具体化したものである。震災復興に関するそれ以外の提案には、上海長江構想やポートアイランドレジャーランド構想等あったが、具体化し今日まで続く数少ないプロジェクトの一つとなった。

募金は、神戸・兵庫・関西の大企業に、兵庫県知事など行政や関西経済連合会等の経済界経由にて呼びかけた。兵庫県、神戸市、及び私どもの担当が、募金のお願いに企業に足を運んだ。当時、研究所と言え、どんな最新性の設備を持つかが成果を左右すると考えられていたので、設備を持たない研究所を設立して、創造的復興が本当にできるのと首を傾げられ引き上げてくる毎日であった。本当に募金が集まるのだろうか関係書の偽らざる悩みであった。

努力はしているが先が見えないその時、朗報が届いた。米国マサチューセッツ工科大学 (MIT) から研究所設立に協力しようと意向が表明された。更に、東京大学総長を退任されたばかりの吉川弘之先生が研究所長に就任して協力したいと表明されたのである。

これが追い風となって、何か頼りなく見えていた研究所構想にも次第に理解が得られるようになった結果、兵庫県、神戸市、神戸に拠点をおく川崎重工業、神戸製鋼、川崎製鉄（当時）、さくら銀行（当時）、兵庫県、神戸市、関経連主要大企業等 29 団体から醸金を頂けることになり、財団設立にこぎ着けることが出来た。醸金額は、提案

者、兵庫県下の大企業、兵庫県、神戸市、関西地区大企業、中小企業の順に整然とした序列となっていた。これは、募金関係者と相手先企業の情報交換等から、各機関の社会的地位等を考慮し無理のない落とし所を探った結果と考えている。募金目標を達成できたのは、MITや吉川先生のご支援が得られたように、震災復興への理解が高かったこと、知事等トップの要請に効果があったこと、関係者の無私な努力が実ったためと考える。

今回の、学生の家での募金活動についても、京都地区大企業へのお願いが主となると思われるが、こうした序列等も尊重し、トップを巻き込んだ募金活動を行うことや、学生を家の活動の理解者を増やすことが、成功への近道である。

また、当時の小生の日誌を読み返してみると、何回も事業計画を書き直している。募金活動に際し、こんな素晴らしい計画を立てているので、募金し研究グループに参加しないかと勧誘するのが小生の担当であった。単に募金の要請を行うのではなく、何をやるのが重要であると考えたためである。

今回の募金の場合でも、募金で本館修理を行い学生の居住環境改善を行うのみでは全く不十分と考えている。文部科学省系の留学生寮でできず、我々の学生の家でしか出来ない価値ある事業は何かを常に考え、募金活動で強く発信することが重要だ。

即ち、単に日常の留学生寮の生活を発信するのみならず、他では出来ない新しい事業を提案し、募金者に理解して貰うようにしなくてはならない。(できれば国や京都府の予算を獲得して遂行したい。)例えば、コモンミールへの企業関係者招待のみならず、学生の家留学生の企業インターンシップ・企業見学会、逆に東南アジア事情等、留学生による講演会を始め、必要なら例えば東南アジアの諸国との調査研究なども考えられる。

最後に、OMの募金との係り等について述べたい。小生も米国のある大学に毎年寄付を行っているが、日本の所得税の減税措置は受けられない。留学生OMが海外から学生の家へ寄付する場合も同等と思われる。学生の家は公益法人であり、国税庁等に陳情し、何とかならないものであろうか。

また、50年余に及ぶ日本人OMはどう対応すべきであろうか。小生、公私を問わず、何とか計画通りの海外調査や交流、旅行が出来たのは、「外国人も我々も同じ人間だ」という、学生の家でハウスコミティーやコモンミール等を通じた原体験が寄与したと考えているが、そのように思われないOMも多数なのが実情であろう。今回の募金活動と併せ、学生を家の「新しい使命」を提案し、この使命は次の世代に引継ぐ価値があると考える有志OMを増やす努力を続ける必要がある。

参考文献

1. 目覚めよ地力－新産業創造研究機構誕生 - 神戸新聞 Web News

(2004年1月13日、1月14日、1月17日、1月18日、1月22日、1月23日)

諸宗教の理解に向かって

アンドレアス・ルスターホルツ

(Andreas Rusterholz)

(HdB 理事、関西学院大学文学部教授)

ちょうど 20 年前の 1998 年に、ヴェルナー・コーラー博士 (1920-1984) の論文集が Peter Lang 出版社より刊行された。1959 年から 1980 年の間に発表された 14 本の論文が収録され、コーラー博士の幅広い思想を物語っている。それぞれの題を見てみると“Begegnung”、つまり「出会い」が重要キーワードだと確認できるが、最終的な結論に至っていないことも分かる。それは氏がしばらくの間、闘病生活を送ったのち、1984 年に天に召されたからであろう。64 才だった。考えを纏める時間が与えられなかったのは残念だが、先生が辿った道を理解し、一緒に歩むことが大切であると、大学の教授などになった彼の教え子たちが考え、その論文集の刊行に至ったわけである。論文集の題は「Unterwegs zum Verstehen der Religionen」、つまり、「諸宗教の理解に向かって」であるが、途中で終わったというより、そもそも完全な理解に辿りつくことは不可能で、常に努力することが必要だということを表している。常にその道を探りながら進むしかないし、それぞれの世代は新たにその課題に直面しているので、コーラー博士の思想が模範的なやり方を提供していると教え子たちも感じたであろう。

1982 年に、マルクス・ヒンメルマンは博士論文においてウィルヘルム・グンデルト (1880-1971) とコーラー博士の日本との出会いを取り上げ、異なる文化・宗教との出会いから生まれた、両氏が受けた刺激について論じた。ヒンメルマンは、前述の論文集でコーラー博士の生涯と思想を簡潔に紹介し、HdB の目的 (principle and purpose) の由来についても説明している。その中で、1955 年のある出来事も紹介されている。来日してから、ヨーロッパ人そして宣教師として歓迎されていないということを感じ、辛い経験も色々あった中のことであった。SOAM (スイス東アジア・ミッション) が所有している土地 (おそらく現在の HdB が立っている土地) を巡る垣が問題になり、近隣の住民からのクレームが殺到した。詳細は不明だが、当然、双方が自らの立場の正当性を主張し、一步も譲らなかったため、解決への道が塞がれ、困った状態になった。どれぐらい揉めたかは分からないが、ある日、コーラー博士は自らの主張を撤回し、日本側の主張が全く理解できなかつたにもかかわらず、それを認めることにした。無理やり相手に自分の立場を押し付けること、キリスト教的な表現を使うと、相手を回心させることは良くないし、控えるべきだと分かったからそう決めた、1959 年 9 月 14 日に開かれた SOAM の総会で報告し、説明したようだ。総会の記録が残っているが、手元にないので、近隣の住民はどの

ようにその判断を受け入れたかなど、詳細を確認することができない。いずれにしても、その場にいた最初の寮生（現在の HdB ができる前の学生寮の寮生のこと）がそれを高く評価し、それはその寮生がキリスト教に回心した要因の一つになったであろうとも書いてある。その最初の寮生は内田伊三雄牧師だった。自らの態度で、大切にしていること（コーラー博士の場合、それはイエス・キリストの教えだった）を示すことによって他人を納得させたことは正当なやり方だとコーラー博士が以前から言っていたようだが、それを実現するにはやはりより一層の工夫や努力が必要だった。他人に自分の考え方を押し付けるのでは、理解が得られないし、平和も実現しないことも、コーラー博士の考えの背景にあった。

1988 年に、コーラー博士が残した原稿が整理され刊行された。その題は“Umkehr und Umdenken”、つまり「転向と新思考」であり、出会いにおいて相手の立場を尊重し、まず自分の立場を再検討し、場合によって考え方を改めることを表している。コーラー博士にとってはイエスによる転向、悔い改めへの呼びかけが決定的であり、最初の学生寮ができた時、毎日「主の祈り」が一緒に唱えられたようだ。（「主の祈り」とは、イエスが弟子たちに教えた唯一の祈りで、キリスト教において非常に重要である。）結果として、それを中心とする共同体ができたのは不思議なことである。何故なら、その中にはスイスと日本という異なる文化の男女だけでなく、無神論者、マルクス主義者もいたからだ。肯定的、否定的あるいは批判的な方々もいたが、共通の事柄を認め合って生活し、その共同体は成立したのであろう。「主の祈り」というキリスト教の祈祷が、最初の寮（1955-1959）の生活の中心だったが、現在の HdB は、前述の経験を生かしてできた Principle and Purpose を中心に運営されている。フォーカスが次第に宗教の理解から異文化理解へと移されたのは、時代の流れでもあるかも知れないが、コーラー博士の思想の延長線にあると考えてよいのではないだろうか。

国際交流で気付いたこと

諏訪 共香
(募金委員)

かなり前の話になるが、修学院の外国人留学生を対象に生け花を教えていたことがあった。十人近くのうち留学生の奥さんもいて、面白い体験をしたことがある。それは、始めに私がお手本を生けてまねをしてもらうようにしていた。その中で私の形に似たものを示した者は一人だけで、あとは形にならない生け花になった。

これには、興味と個人差があるのだが、そこには彼らの文化の中に形、色使い等でお手本に合わせようとするところがあるかどうかである。しかし、感心した留学生の一人にベルギー人の場合がある。このベルギー人は私の生けたものとよく似た感じのものを手際よく生けていた。彼女が手本をよく見て、彼女の興味と合っていたのかもしれない。しかし、その他はまったく違った形のものになっていたことは、文化的背景、個人の価値観の違いが表出されていたと思われる。文化には、言語、習慣や価値観、コミュニケーションのスタイルをも含まれる。

国際交流には幅広い言葉の理解以上に、主観的な比較評価をベースとする個々の判断がよく表わされる。しかし、これは国際交流だけでは無く、同じ国籍の人の間でも同じである。この場合、何が重要かという「お互いの会話」である。日本人は知らない人との会話は少ないと言われているが、国際時代の現在、人としてもっと楽しい人間関係の創出を難しくしているといえる。さらに、言語から習慣や価値観まで関係する。即ち、文化そのものである。其のため、国際交流においては文化度と価値観、さらに常識のレベルが多いに関係してくる。

しかし、会話の保持ができたとしても、それが「付き合い」と呼ばれるところまで導くことができるとは限らない。そこには、いくつかの可能性がある：心の広さの最適なレベルは状況により変化するものである上に、協調関係には様々な利害対立のあることが多い。特に外国人と日本人の場合、言語の理解度、非言語、例えばスペースの使い方、これはアラブ系の人と日本人とは大きな違いが同性同士でもある。日本人は慣れてない場合、相手は押しの強い人と思う場合がある。また、スペイン人やイスラエル人等は上記と同様に距離を余り置かない。反対に日本人の距離は固くて、冷たい、または友好的でないと思われる場合がある。これらの様態は、最近では、日本人の若者が普通に行っている場合を目にするが、多分、留学先等で毎日目にしてもうお辞儀をするという日本の方式を忘れかけているのかもしれない。また、これらは、**Hidden culture** として自然に自分の感覚、無意識の行動として出るものとなる。この点は、日本人としての独自性、主体性の問題と関係してくる場合がある。そして、この文化的正体は自発的に覚えるものであり、その中身は経験を通して得るものである。

例えば、敬語の使い方、共同作業の価値、箸の使い方、等が一例であるが、これらは日本人の場合、当然の知識、行動と考えられ、社会化されている。しかし、日本人の全てが同一というわけではない。

国際交流では、この社会化がお互いにどの程度まで受け入れているかを計る必要がある。これは言語だけの問題ではない。この他に我々が自覚していない要素がある、それは直観である。直観的なものは自覚が及ばない場合が多く、そのためには文化的適応力を伸ばすことが必要である。例えば、会話のなかでの言葉の流れの違いがある。特に日本人は自分のことに関しては、おしゃべりでも自分のことを余り話したがらない。これはお互いの理解不足につながる。目に見えない文化は、異文化理解にとって、あとで無理解ゆえの大きい問題と関係することがある。そして、この時の問題は双方が諦めるという結果になりやすい。この場合、自分の周りについてもっと気が付くこと：知覚概念が必要である。会話の流れは大事な要素でもある。さらに、一般化と固定概念との違いなども分別することが大切である。多くの国ではこれらの違いが明確にされていない。

相手の文化との類似性がわからない場合でも、できることがある。それはさりげなく色々と話しかけたり、問いかけることにより理解が進む。それにより自分の主観的な比較や評価ができ、自発的に望ましい行動をする手法や仕掛けをしてより深い理解につなげる。さらに、国際ビジネスなどでは、協調できることは多いが、いつもうまくいくとは限らない。それは、協調関係においては邪魔しあうよりは助け合うほうが、利益に結び付くと考える人が多いが、多くの「付き合い」には様々な利害対立が存在する。これは、心の広さの最適なレベルは状況により変化するからである。

国際交流とは、近所の人、会社人、学生、旅行者などと様々あるが、どのレベルにおいても異文化理解の重要性は基本的に同じである。ビジネスなどで戦術的な行為が必要な場合があるが、基本はおなじである。しかし、有効な戦術は使われ続けるが、非有効なものはその反対である。この場合、戦力は進化であり、直接的な淘汰のプロセスである。協調関係の中でも、お互いに自己の利益を追求する結果生まれ育つものであり、そこには助け合うほうがお互いの利益に結び付くという考えが潜んでいる。

国際交流における付き合い方は、かなり幅広い分野に適応されることであるが、大きい失敗をさけるためには「目先の利益にとらわれないこと」「自分の方から先に裏切らない」「相手の出方が協調/裏切りでも、其のとおりお返しをすること」「策におぼれないこと」「よく話し合う」等があげられる。しかし、最近の若者、外国人の一部等は時々裏切るという話を聞く。其のために、その集団との協調関係を築くには、活力、逞しさ、安定性がだいじである。例えば米国等では道路の右側で車を走らせることにびっくりしても、そこにいる以上受け入れなければならない。この「受け入れ」も非常に大事な概念である。

【HdB を築立って】

Thoughts on the reconstruction and continuation of the Haus

Ta-Yan LEONG (Malaysia)

(OM1969)

In the 2013 HdB Yearbook (pages 42-43), I wrote about my own fortunate experience at the Haus and its impact on my work and life after leaving the Haus. Then in the 2015 HdB Yearbook (pages 28 -30), I wrote about my own encounter at the 50th Anniversary celebration of the Haus.

Given the noble founding principle and purpose of the Haus “where men [and women] from different continents and cultures, of different races and colours, different social strata, religions and outlooks live together”, the reconstruction and continuation of the Haus has become even more relevant and timely (if not already too late?) in the current world that sees daily headlines of terrorism, harassment, segregation, discrimination, etc.

I have personally benefited from my experience at the Haus and so have many other Haus mates who have written in previous HdB yearbooks. It is beyond doubt that the Haus experience has an important impact on the Haus residents for their later contributions to society; and particularly so in the current Japanese education system of emphasising “internationalisation” and against the backdrop of the Tokyo 2020 Olympics.

I think it would be great to let the community at large understand that the Haus founding principle and purpose is almost the same as the Olympics spirit. The only difference is that the Olympics focus on international friendship and understanding through sporting competition whereas the Haus offers international friendship and understanding through living together and Haus activities under the same roof. The Haus experience helps to nurture and create future community leaders, thus benefiting the society.

An old member organisation will no doubt be very important in supporting the course of the reconstruction and continuation effort through collective experience and a common goal. In fact, it should be expanded to include “friends” of old members who identify with the founding principle and purpose of HdB. The old members would be good living examples to demonstrate the benefit of the Haus and convince the community at large that the principle and purpose is worthy of support, thus winning over friends from the community.

I wish the reconstruction and continuation of HdB good luck and every success!

Mutual Respect

Ahmet Onat

(OM1993, Faculty member, Sabanci University, Turkey)

Back in mid 1990's HdB was a crazy place. People from all over the world, and from all walks of life gathered there, with very little in common. Different cultures, different views. Many energetic young men living in the same building, and no authoritative figure putting pressure. A perfect recipe for chaos.

But then, it was quite a peaceful and orderly place to live in. Not gleaming and spotless and slick (quite the opposite, in-fact, since there was no money back then for maintenance either), but a place you could call your home away from home. Not only after you went in your room and closed the door, but the moment you passed through the entrance with Bamba san's "Okaeri". You could feel a warmth and the coziness of being at home with the family that moment.

Although there were people each of us liked, disliked or completely failed to build a relationship, it was a place where you could depend on the members for their support when you needed, and were ready to give yours too. I got to know so many members there, but do not recall any selfish guys among them. Any door could be knocked on at any time, night and day, anything could be borrowed when necessary, even if the owner was not home! The house parents were there not as problem solvers or order enforcers, but as people who listened to us. Their door was never shut.

Looking back, I realize that what bonded us together was mutual respect. Irrelevant of background, opinions or personality, we were all humans and deserved respect for that. Once we respect each other, we see that all problems dissolve into insignificant details and are no more obstacles to overcome. This attitude, for me, is the greatest virtue that I have earned from the Haus, and have always lived to it ever since.

Out of HdB

金 智華 (中国)
京都大学工学部



From April 2014, when I started my stay here in HdB through the introduction of one of my professor and senior who was an old member, it has been three years, until I graduated as a resident, “finally”, in March 2017. Later, due to some personal issues, I applied for extension of the stay for two extra months, until early May, as a scholar, providing me this honor to be on the year book again.

Looking back this year, I must say that I realized for the first time that life in HdB has influenced me heavily. It is apparent fact that spending hours each day in a place for three years would change a person, yet the perspective after leaving the place comes even more intense.

First of all, in this academic year, I went through a number of important events in my life. I tried to apply for another graduate school, wrote my graduation thesis, graduated from university and was waiting for offers, during the last months of my stay in HdB.

There were times that I was down and hesitant, being skeptical and unconfident on myself, keeping blaming and asking myself why things are working in a way that was not of my preference. I have been grateful always that friends I met in HdB was constantly by my side in such times, trying to persuade me to keep on and giving me practical advice. Were it not with them, it must have been a hard battle with myself, going through all the tough times, making life-changing decisions. It seems to have been wise even looking back from now thanks to all: there were seducing breakfast smells coming out of the kitchen in mornings that wakes you up to start a new day, people sitting in the sofa of the lobby for drinks when you drag your brain-full of bugs back home. All these precious friends you met in HdB and time spent with them are priceless, while if you are out there in the middle of nowhere, like in an isolated apartment, there are few options apart from saying “Good morning!” to air in the quiet single room or sleeping over the hard times trying to avoid facing the real world, which for sure does no good in encouraging a pressured undergraduate student.

Secondly, discussions and interviews that I had during this year made me think about what HdB brought me about in discussing with people.

Honestly I hated some of the events or hangouts, at least to my comprehension by then, basically meant to take photos for Instagram for some likes. For now, for part of them, my prejudice has not changed greatly, especially as someone who hates all the SNS groups ringing up frequently. However, I could see them in a broader sight now. Noisy or sometimes quite overwhelming events and meetings at least really does train people. With happenings that are not all necessarily pleasant, there were additional chances for residents to talk to people and get to know different culture, which they would normally not attach at all. It might sound slightly pushing, but effective in instructing. People you meet at school are usually “chosen”: sharing the same major, the same hobbies or some same goals in a student group. The barrier among discussions occurring with above people are generally comparatively low, but that is definitely not all of the world. There are more people in the world who know little about your field, who treasures things that you would not have a look at, and at times even happen to be stubborn and talkative. I would say some part of HdB that I disliked was in fact the best place to get trained to communicate with them calmly, amiably and modestly, gradually throwing away the habit of being indifferent, ignorant and sometimes barbarous attitudes, when confronting people with diverse backgrounds. Depending on people, careers might bring them to a narrower path in meeting people, yet this skills is better learnt now when you are young than never, and, provided in HdB naturally.

Spending several months out of HdB this year, provided me of a fresh view of the time in HdB. Missing those I met there, I would like to send my gratitude to them for being there, accompanying my joys and pains, listening to my perhaps boring jokes, teaching me what might be better and providing me with chances to grow.

【レジデントより】

HdB での人生

#201 岡田 明日馨（日本）

京都外国語大学



国際交流を人と人との交流と考えた時、
「ここからの気持ちは、ここへ届く」
まごころ「真心」は人を感動・感激させ、何か力が与える。
(私のお気に入りの言葉)

私は HdB が大好きだ。

ここに住む人たちが大好きだ。

この寮を支えている人達が好きだ。

アイデア論の対話編「メイン」で述べられている興味深い言葉がある。(ちょっと哲学っぽくなります。笑)

”人間の魂は死なず、何度も生き返って冥界と地上を行き来するが、魂は、冥界では全て知っているのに、肉体を得て地上に戻ると記憶していた事がらを忘れてしまう。”
(プラトン)

この言葉に私は考えさせられた。もし、400 年前今のような肉体があり、今のよう生活しているところ、突然死が来るとなれば、心残りがあり、また人生をやり直したいと思うだろう。

私たちは前世紀に何かやり残したことをまた思い出しにこの地上（この世）に来たとするのであれば、早く思い出さなければならない。もたもたしている時間はない。他人にヒントをもらわないといけない。他人はあなたの人生にヒント与えてくれる役割でもあるからだ。

多分この寮に入寮してくる人は何かを求めている人（人生ヒント）を求めてくる人が多いのではないと思う。HdB は必ずあなたの人生に対して濃厚なヒントを与えてくれる場所です。広い考えを持ち、他人を尊敬し、お互いに理解する姿勢のある人達が濃厚なヒントを与えてくれる。そんな濃厚なヒントを与えてくれる人達とはたった2年間しか一緒にいることができない。だから一言伝えたい。HdB での生活を絶対に

無駄にしないでほしい、この寮に住んでいる人達は本当に素晴らしい。何が素晴らしいかは住んでいたら分かると思うが、それは彼らの人間性だ。他人を素直に褒めることや、他人を思いやること、他人を愛することが彼らは素直にできる。

彼らは自分の気持ちに正直で、自分の心の気持ちにしっかり耳を傾けている。その心の声に一生懸命答えようと日々の努力を惜しまない。彼らを本当に尊敬するいっぱい彼らから学ぶことは多かった。

彼らに巡り合えた事と、彼らから色々な事を学べたことに本当に感謝します。

あー、この2年間思い出を話していくと泣けてくるので、一言。

YOU STAY IN MY HEART, I STAY IN YOUR HEART ...FOREVER...I LOVE YOU..

これからは、 みんなの充実した将来を祈って乾杯！！！！

毎回美味しい素敵なケーキ作ってありがとうねみんな。特に DAISY ^^ 謝謝

(HdB を愛しすぎた。。。)

YOU ARE MY FAMILY IN THIS WORLD

最後に

樋口さん、清水さん、ハウスファザー、ハウスマザー、色々ご迷惑をお掛けしましたが、お陰様で成長させていただきました。樋口さんには家賃滞納から、イベントのフォローまで色々していただきありがとうございます。樋口さんは寮生のことを一番考えてくれているんだと樋口さんの愛を感じさせられました。見えないところでいつも私たちを支えてくださりありがとうございます。HF の面倒みの良さはわかりにくいけど、とても HdB レジデントの愛が深いことがとても伝わってきました。HF の支えがあるから、HdB がこんなに良い雰囲気になってきているんだと思います。YOJI とこれから生まれてくるお子さんにとって本当に良いお父さんになると思います。良いですねー。HM との日本の社会問題点については色々な面から考えさせられて、良い学びになりました。元気な赤ちゃん産んでくださいね。色々ありがとうございます。

あと、皆さん広島に行くときは、連絡してくださいね。お兄ちゃんの応援もよろしくお願ひしますので。(兄、広島カープ 岡田明丈 背番号17番 投手の応援もよろしくお願ひします)

ではみなさん、またどこかで会いましょう。I LOVE HDB, SEE YOU SOON ...
本当に2年間ありがとうございました。

HdB の大きな輪

#202 津田 夏帆（日本）

同志社大学文学部



退寮する日、ロビーにお別れをしようと、降りたのを覚えています。様々な思い出が一気に鮮明に思いだされて涙が止まりませんでした。皆で遅くまで喋ったり、料理したり、楽器を演奏したり、誕生日を祝いあったり、一緒に雑魚寝したり。それは入寮する日、実家を出る時に出てきた涙と同じ気持ちで、たった1年間過ごしたHdBが、私にとって19年間過ごした実家と同じくらい重みのある大切な思い出と経験を残してくれた場所になっていると強く感じています。そのようなアクション

を日々起こしてくれたかけがえのない、エネルギー溢れるHdBの人々を今、家族に会いたいと思うようにとても恋しく思っています。絶賛HdBロス中（笑）

私は現在、韓国に留学しています。世界各国から留学生が集まり、日々、様々な文化や宗教の違いを知り、刺激を受けながら生活させてもらっています。彼らと会話する中で、HdBの人達から学んだこと、言語や宗教の事、その国のことをよく話します。

「韓国に来る前、日本で国際寮に住んでいて、あなたと同じ国の子からこんな言葉、文化、料理を習った。」そんな事を話すだけで、相手との距離をぐっと近くに感じられ、そこから色々な話に発展し、より深い国際的相互理解に繋がっていると感じる事が頻繁にありました。そんな時、たとえ自身がHdBにいなくても、まして日本に住んでいなくても、このハウスが自身と各国から来た友達との関係を、彼らの文化宗教、そして個人個人を理解する上で架け橋となり、同時に間接的であっても、HdB、Live togetherの輪が広がっていると強く感じます。

HdBがこれまで50年間様々な人々のハウスとなってきたのなら、私が感じる輪の広がりには世界中に、私たちが思う以上に大きく成長しているのではないかと思います。HdBの輪の一員になれたこと、それを支えて下さっている方々に感謝して、この広がりがいつまでも途切れず、続くことを強く願っています。

A letter to recommend living in HdB

#205 You-Shan Tsai (Taiwan)
Kyoto University

To students who are finding a place in Kyoto,

Hey, I have a good news to share to you. Here is my experience:

Since I moved in, it is already one year pasted. Both of my studies and life in Japan become better and better although I feel busier in every following semester. This good place with a group of siblings supports me comfortable rests, enjoyable talks, and unforgettable experiences.

Every times when I came home late, there are still people at the lobby saying “お帰り” (welcome back home) to me which warm me again and remove all of my tired. Common meals, I can enjoy different kinds of delicious dishes with my siblings and freely talk what I want about my lives. During the new year, we make “お節料理” (traditional Japanese food for new year) together. It provides me a chance to experience new year culture in Japan. Because of here, I met lots of awesome siblings. Once, Hikaru invited me to her house for new year. In her house, we spent a wonderful time together and I feel like being real home for new year celebration as well. I think these kinds of experiences are hard to get when you live alone, especially abroad.

If you are thinking to studying in Kyoto now, then I will strongly recommend here. HdB, Haus der Begegnung, house of encounter, a place that built up my personality to embrace the studying, the life, and the world.



New year in Hikaru's house

From left to right:

Nils, Hikaru's mom, Melon (dog), Hikaru,
Judy, Ko

Best regards,
Judy

The Climate Change in HdB across 3 Years: Becoming a Home Away From Home

#214 I-Ting Huai-Ching Liu (Canada)

京都大学人間・環境学研究科



It has been 3 years since I live here in HdB, and I have witnessed a complete change over time. When I first moved in in spring 2015, there were a lot of new residents who don't know each other, and few people were taking initiatives or joining activities, leaving the lobby almost always empty. The second semester internet (hard) connections improved, but the atmosphere (climate) as a whole was a strict one towards rule adherence, leaving little space for casual activities among residents. That was when I thought of volunteering to be the next president. I didn't think I would be the ideal leader, certainly other people in the dorm are more capable for that, but I felt that HdB at that time was not in need of a good leader at the center of the stage, ensuring that every event goes smoothly like the boss of a company. What it was lacking was the real, soft connection among residents, the sense of community and bonding with each other, and I wanted to create a platform for that to happen.

So as the president during times of transition, when new house parents moved in, I tried my best to connect old residents with new ones and Japanese students with international students, such as initiating language study groups and the "house brother/sister" pair-up between old and new residents, proposing to use the team fee to make birthday cards for residents (Hanna's suggestion). Some worked while others didn't. My boyfriend Winij and my friend Jennifer have witnessed the "good old times" before I moved in, and they suggested that connecting the Japanese students is the key towards social harmony and good atmosphere. Following their words, my team members consist of three and a half Japanese people (and half an American lol), who created good bounds between them (two of them became president in the subsequent semesters). I did my best not to act like a leader, but rather as a listener, to hear opinions from others and let the tobas do their job. It turned out to be a tough semester for me, partly due to

some problems going on among residents, but partly because I was only receiving complaints and never asking for recognition. I thank all those, including house parents, who encouraged me during that time.

The fourth semester I was relieved from my responsibilities, and things started to get better. The new residents who entered during last semester were comfortably installed, became friends, and got used to initiating different activities. The sense of community was growing, with official and unofficial events happening frequently where new residents were well involved. The fifth semester the momentum continued, and by now I can say that HdB 2018 is completely different from HdB 2015. So vibrant and positive is the community now that many of us do not want to leave after our 3-year contract, so we continue to stay here as scholars! Seeing the climate change in the house assures me that all my unseen and unknown efforts have been worthwhile.

My efforts, and that of many others, were not uncompensated. In the course of 2 years' time, my life was endangered twice from low blood glucose, and two residents (Daisy and Hikaru) along with Winij, House Parents, and Higuchi San have discovered me and took me to the hospital. Many others have been watching out on me too, and it is thanks to these people, to this warm community, that I am still alive today. We help each other out and we enjoy activities together. I sincerely hope that the joy, the warmth and the positivity in the house will continue, and that HdB will remain what it has finally become: a home away from home!



Great accomplishment

409 Ramongolalaina Clarissien (Madagascar)

Kyoto University



This is the last time I can write the end year book of HdB. I will leave this International Student House. The questions are: what will you remember about this dorm when you leave? What have you accomplished here? There are few accomplishments that I am humbly so proud of. The following are the most memorable among them.

I won prizes of best cuisine 2017 when I participated in African-American-Caribbean cooking contest. I didn't know how to cook for more than fifteen people before I moved in HdB. I began to learn cook by myself in this International Student House. My journey of cooking started with participating to make dishes at any event as possible; and I have never lost any cooking contest that I was part of, because I have been getting better and better. I would humbly say I became semi-professional.

I just finished my PhD defense and am expecting to get my doctoral degree this coming March. Finishing a doctoral course is not easy, everyone understands that. And it gets even more harder when you are resident in HdB and try to not miss all the event. However, we always help each other with colleagues and, specially, dorm mates. And that makes everything is easy. Even the gaming time few nights a week refreshes our brain.

In addition, there are many great moments that always be remembered. My favorite moments are Christmas party, International Food Festival, and trip – staying up all night drinking and playing games with friends and family. I will always remember these moments, they are so fun and made me feel like living in the four corners of the world as a really international student. These fun moments helped me to get ready to the next level. Even little fights that I picked up with few people will be remembered as fun moments later on.

My status as a resident in HdB will be over soon, and this is the last time that I have an opportunity to write to this book. However, my life in HdB will never be over soon. I hope I will still be able to participate to some events when I leave. Furthermore, HdB will always be part of my life.

HdB and its great social life

#410 Mathieu Fevre (France)

Kyoto University, Graduate School of Science



Hi everyone ! My name is Mathieu. I come from France. I arrived in Japan one year and an half ago, without knowing anything about Japan. I stayed one year in a dorm of Kyoto University during my second year of my master. My first dorm had a strict rule about visitors and the social life was not that great. During the year, I met Alexander and talked to me about his dorm. He seemed very happy about HdB dorm, and talked a lot about its events. I participate in the International Food Festival in which I was able to taste delicious food from many countries.

Then I graduated, I got a scholarship to do a PhD in Kyoto University. I had to move out my first dorm. I spent few months in America in a dorm, where many international students were staying. I enjoyed those few months. So the choice of the new dorm was obvious : I directly applied for HdB and I have been accepted. I had an image of how great was the social life in that dorm and it turned to be true : a lot of events, and common meal where you can enjoy different kind of food with you HdB friends and other guests. Whenever you go to the lobby, you can find someone to talk to. Also, i rediscovered a game that I played only once : Catan. This board game gave me a lot of fun recently, and I really want to play it again ! Another positive point of HdB is that dorm's residents are not only foreigners, there are Japanese as well. I am living in Japan, and i have a chance to meet and to talk to Japanese. This gives the opportunity to know more about the Japanese culture, about the country in which I am currently living, and to learn the Japanese language. In HdB dorm is that (almost) everyone is in charge of something in the dorm. My job was to take care of the High tech of HdB and to publish articles on HdB's blog.

I am looking forward to sharing more memories with HdB residents, and to meeting new ones of the new semester !

HdB:

One house, different people, different languages and cultures, but one family

#418 Juliane Späth (Germany)

Protestant Theology, Doshisha University,



A bit more than one year passed by since I have moved in to HdB. I still remember the first two weeks after I moved new into the house. Everything was new, different, but exciting. Day by day I met new residents of the house and week by week I made new friends. It did not take a long time until I understood that this is more than

just a student dormitory, a place which gives students from around the world a place to stay. People here are not just neighbors or study colleagues and friends. We are more like a family. I think I can say after one year of living in this house, that I might be able to tell at least a bit about each resident and his/her character. We all know each other quite well, know, what the other one likes or dislikes, who is good at cooking, sports, piano, ping pong etc. ...

From time to time we all learned about each other, but also about ourselves. We learned how to deal with different personalities, conflicts and problems. I do not want to say that we all are the best friends, but we all know how to treat each other in a respectful and peaceful way to make an enjoyable life together in this house possible. Especially the obligatory house events like Common Meals, Trip, Sports Day, Big Clean Up, IFF, Seminar and a lot more help us to get closer to each other and make the bound between us residents stronger. During my stay of one year here in this house I definitely learned something for my life, human relationships, grew up mentally and made a lot of good memories with the people in the house. The day will come, when it's time for me to move out of the house to go further on in my life, but until then I wish that I and all my neighbors in this house have a great time together. For the future of HdB I wish it will give a lot more students the chance to move in and get the experience of the "HdB Life", "where so far away from home, no one is alone."

心を育む家、それが HdB だって気付いたんだ

#419 大川 夏海（日本）

立命館大学国際関係学部

私はこれまでの自分のどこかを変えたい、偏りのあった価値観を拡げたい、国籍を越えて“人”が協調し合う本当の意味を知りたい…。そんな思いから、当初は家族中が HdB への入寮に大反対だった中、まさにあの瞬間は“家出少女”のようだったとでも言えるでしょうか、カバンひとつ抱え、腹をくくって家を飛び出した日のことを今では懐かしく思います。ここに来て、もうじき1年を迎えようとしています。

私は昔から人と交流することは好きですが、根は人見知りで海外経験もあまり豊富ではなかった私は、暮らし始めて間もない頃は、みんなと早く仲良くなりたいと思いつつも、自分からその門戸をなかなか開けられずにいました。そんな折に、イベントやお誕生日祝いへの参加などみんなとの交流の機会を与えてくれ、背中を押してくれたレジデントが何人もいました。それからというもの、毎日学校を終えてハウスに帰ってみんなと時間を過ごすことが待ち遠しいほど、今では私にとって HdB がかけがえのないものになり、「家族」と呼ぶに相応するほど仲が良く、和気あいあいとした空気の流れるこのハウスが大好きです。これまで、年間行事のイベントや日常の何気ないシーンを通じて、私は HdB の文化とも言える、ここに住む「人の温かさ」と、異文化が交差する国際的な空間においてその調和を見出すべく「皆が居心地が良いと思える環境を、みんな自身の手で紡ぎ合う」そんな心温まる姿をこれまで幾度も目の当たりにしてきました。国籍や宗教、言語、文化の違いを越えて、結局は“人とひと”としてお互いの価値観に気付き尊重し、違いがあるからこそ「対話」を通して分かり合い、言語の壁があったとしても、時間を共に過ごし、経験を共有し、共感し合うことで家族と言えるほどの仲間ができます。私は、言葉にすると単純に聞こえるかもしれないこれらのことを、この1年間で、地球や国際関係の縮図とも表せる多様なバックグラウンドを持つ人の集まるここ HdB だからこそ、大いに体感し学ぶことができました。

その反面、平和的で楽しいことばかりではありません。時には、イベントや当番の役割と責任のもとに考え方や経験が異なることでケンカしたり、コミュニケーション不足から相手にきちんと意志を伝えられていなかったことが原因でうまく協力し合えなかったことで悩み、壁にぶつかったときもありました。International Food Festival

(IFF)での経験から、日本人同士なら“空気を読んで”なんとかうまく出来るだろうと思えることも、常識だと思い込んでいた物事も相手にきちんと伝えようとする姿勢なしには、ここでは通用しないと気付きました。

すべては自分が勝手に狭い視野の中で線引きしてしまっていた“あたりまえ”が常に相手の立場に立って考えることや理解してもらえるようにきちんと言葉で伝え、行動で示すことを制限してしまっていたのだと気づかされたのです。その度に、本心から私を叱ってくれアドバイスをくれた仲間には心から感謝し、教訓としています。秋 Semester では、チーム (Secretary) という役割の中で内部組織であるレジデントにとっての快適な環境・人間関係の構築、新入寮生にとってのオープンで歓迎的な HdB の在り方、外部の方々からみた京都初の「国際学生の家」としての在り方などあらゆる角度から、国際的で多様な人が集まる環境はどんな場所であるべきかなど、HdB のあるべき姿って何だろうと時にみんなでディスカッションの機会も持ち、与えられるだけでなく人に何かを与えられる存在になろうと考えながら過ごし試行錯誤した経験は、とても有意義なものとなっています。これらの経験すべてから導かれる私の思う HdB の魅力とはずばり、「人と人との影響し合い、助け合い、知恵と力を束ねて一生懸命になれるところ」だと思います。これからもハウスが笑顔にあふれ、さらに素敵な環境づくりができるように、前よりちょっぴり成長できた私ができることから、皆とこの空間を育んでいきたいです！

☆私の HdB の好きなところ☆

- ① 自分だけの「当たり前」じゃ通用しない空間
- ② 私を叱ってくれる人がいる
- ③ 家に帰るのが待ち遠しいと思わせてくれるくらい魅力的で楽しい“我が家”
- ④ イベントにみんなで一丸となって一生懸命に打ち込むことのできる環境
- ⑤ 気持ちと考えをきちんと言葉で相手に伝えなくちゃ始まらないところ
- ⑥ 切磋琢磨し合える友の存在
- ⑦ 自分の力を思いっきり試せる場所
- ⑧ 困ったときには助け合える仲間の存在
- ⑨ 新しいチャレンジにあふれている
- ⑩ 人のため、みんなのために頑張りたいと思える環境





【活動報告】

2017年度 活動表

【前期】 Chairperson: Kosuke Onishi Vice-Chairperson: Chen Yijun
Accountant : Sarasa Amma Secretary : Juliane Spath
Advisor : ELSakka Hossam

4月 8日(土)	歓迎会	Welcome Party
4月 15日(土)	スポーツデー	Sports Day
4月 21日(金)	コモンミール	Common Meal
5月 12日(金)	コモンミール	Common Meal
5月 13日(土)	セミナー	Seminar
5月 26日(金)	コモンミール	Common Meal
6月 9日(金)	コモンミール	Common Meal
6月 10~11日	旅行	Trip
6月 30日(金)	コモンミール	Common Meal
7月 8日(土)	国際食べ物祭り	International Food Festival
7月 9日(日)	大掃除	Cleaning Day
7月 14日(金)	コモンミールと選挙	Common Meal & Election

【後期】 Chairperson: Alexander Van-Brunt Vice-Chairperson: You-Shan Tsai
Accountant: Jiseul Park Secretary : Natsumi Ohkawa
Advisor : Stef van der Stijk

10月 7日(土)	歓迎会	Welcome Party
10月 20日(金)	コモンミール	Common Meal
10月 21日(土)	スポーツデー	Sports Day
10月 28日(土)	コモンミール	Common Meal
11月 11日(土)	感謝祭	Thanks Giving Day
11月 17日(金)	コモンミール	Common Meal
11月 18~19日	旅行	Trip
12月 1日(金)	コモンミール	Common Meal
12月 16日(土)	クリスマスパーティ	Christmas Party
12月 17日(日)	大掃除	Cleaning Day
1月 12日(金)	コモンミール	Common Meal
1月 13日(土)	セミナー	Seminar
2月 2日(金)	コモンミールと選挙	Common Meal & Election

Welcome Party Speech (April 2017)

Kosuke Onishi 大西 耕輔 (アメリカ)

Chair Person Spring Semester

Today we are here to celebrate the beginning of a new semester at our dorm and to welcome the new residents and scholars. I remember when I had come down for the welcome party in the fall of 2015, I was a bit nervous to meet the other residents and it did not help that the room was full of distinguished professors. These people are your new family, and you will soon find that there is no reason to be nervous.

I can only speak from personal experience but this dorm is extraordinary. Residents are selected so that there will always be a diverse group with different cultural backgrounds. Everyday is a learning experience, and although this can times lead to clashes, HdB represents a hands on experience where ‘living together’ is not merely a slogan but a way of life. You will be pushed by other brilliant students to work harder each day, and if you are going through a rough time, there is no dearth of support.

I hope that this evening is indicative of things to come and that the new residents and scholars will continue to get to know the residents that already occupy this dorm. There is always a chance to socialize in the lobby after going to school. Moreover, as you will soon learn, there are a number of important events that naturally bring us all together. So again, on behalf of all of the residents here, and the wonderful staff of HdB, I would like to welcome you all to the dorm, and I hope that you have a wonderful time leaving at this special place.



Kosuke second from left, with present house father and former house father, Samuel Vollenweider

Sports Day (Spring Semester)

Sarasa Amma (Japan)

This year for the Sports day we did three games, darts, a building game and a ‘cone game.’ Originally, we had five games in preparation, the others being dodge ball and a hula hoop relay game. The idea that we had was that we really wanted to get a balance of ‘physical’ and ‘team strategy’ sports. So for this purpose we tried to come up with a wide variety of games. However due to a series of unfortunate events, we canceled the dodge ball game and ran out of time for the hula hoop game.

Regardless, after many meetings and going back and forth between ideas and the hundred yen store, we were finally prepared. The model for the building game was assembled, the dart boards were hung up and the cones purchased. Upon a brief introduction, we split everybody into 3 teams and for the next 2 hours we completed through these various activities. Some of the games were quite unconventional, but much to the Tobans relief, they seemed to be successful. After much fierce and close competition, eventually a winner was declared. A brief honorary dodge ball game, and a photo later, we all sat down to enjoy pizza and Tapioca tea.



Seminar (前期)

Chiaming Shen (Taiwan)

今期のセミナーは“cooking science”でした。講師はレジデントの HdB が誇るシェフ・Clarss でした！レジデントが講師を務めるのは史上初らしいです！

最初はスライドを用いて料理中に起こる科学的な反応を真面目に(?)勉強しました。その後は実学。Clarss が予め焼いていたパンを皆で味見して、砂糖なしだとどうなるのか？活性化していないイーストを使うとどうなる？塩の役割は？などを食べながら美味しく学びました。

普段何気なく料理しているけど行程や調味料一つ一つに意味があって、それを知ることの面白さを学びました。

その後、グループに分かれてパンやおかずを作りました。ピザを作ったり、ベーコンエッグを作ったり、肉を焼いたり...皆思い思いに楽しく調理していました。

時間は掛かったものの、無事パンも焼け、皆で食べました。ピザパン、ソーセージパン、チーズパン...やっぱり焼きたてのパンは格別でした。

皆で食事をすることはあっても調理することは余りなかったけれど、やはり食を通じたコミュニケーションは大事だなと感じました。

大変なこともありましたが、面白い授業と調理を教えてくれた Clarss には感謝です！

トリップ (前期)

Ji Seul Park (韓国)

今回のtripでは淡路島に行ってきました！嬉しいことに晴れ女がHdBには多かったようで、天候には恵まれて楽しい旅行が出来ました！



当日はHdBから出発し>河原町一三宮>三宮一明石>明石ferry一岩屋ferry>淡路島の経由で行きましたが着くまでに4時間は掛かり行くだけでも大変な集団移動になりました。

でもその後は、淡路島の夏の海を見て疲れが吹っ飛んだのか、皆子供の様にはしゃいでいました ^^/ 海でのActivityでは、海に今まで一度も入っ

たことがない人などもいて、今回のtripはその様なレジデント達にとっては最適なtripに成ったのではないかと思います。日本は島国なので日本人にとって海は身近な存在ですが、他の国や地域の環境などによって海に入る機会が異なってくる事を改めて知らされました。今回海の水温がとても低くその気を外らすためにBoatやBeach ballなどを使ったりして体を温めながら遊びました。帰ってきてからの男女のシャワーの取り合いは激しかったです。その日の夜の夕食は買い出し組の何人かで現地の大型の車に乗り鍋の買い出しに行き、帰ってきた後はみんなで4類の鍋を囲みワキャワキャしながら飲んだり食べたり写真を撮り合ったりしてその日の夜は楽しみました。

その次の朝は早く帰る組と帰らない組に分かれ行動しました。後半組はイチゴ狩りや、淡路島の有名な観光地を巡り満喫してから寮に帰ってきました。なぜか知らないのですが一人だけ声がガラガラになって帰ってきました、満喫した証拠ですね。皆にの人生の中に良い思い出となっていて欲しいです。trip当番やアイデア出しに協力してくれた方々本当にお疲れまさでした。



International Food Festival

Christopher West (England)

On the day of the 8th of July, We invited neighbors to come by For some food and a drink And entice them to think ‘Gosh, what a nice bunch of guys!’

For you do not need to be a clairvoyant To know that our house, while so joyant Can at times be quite loud And so full of a crowd That we may seem, how’d you say?, an annoyance.

So we came up with a way to say ‘thank you’ And to return to them all that they are due. We’d cook food from our homelands, Sell it from our own stands And friendship would surely ensue.

We decided that it would be preferable To call it International Food Festival. The posters were made And the tables were laid We cried out that this one would be best of all!

But no banquet could ever occur Without dishes abound to savor. We worked through the night, And by early sunlight All the tables could not hold anymore.

En masse, our guests all descended To sample what our chefs recommended. But it couldn’t be done Without helpers to come And ensure that our guests comprehended.

As the hours of the day ticked away, Many belts were being forced to give way. The tables unbuckled, The servers untroubled Of leftovers left to throwaway.

Now it’s over, we must all agree A great time was had by attendees. For we all ate and drank And for that we must thank The hard workers of our HdB!



Sports Day (Fall Semester)

Hossam El-Sakka (Egypt)



-What's an HdB sports day for ?

Being the only event –along with seminar- to be held twice a year, sports day represents more than just health awareness and constructive competitiveness. It is the bedrock on which, the process of consolidating the new body of house members and family into one unified healthy functioning society, is built.

-So why was this one special ?

October 21st 2017, on a cloudy Kyoto morning, 16 talented students present, geared and ready to get that win. Put into 4 balanced teams and competing in 4 sporting events –Badminton, Volleyball, Football and Table Tennis– Unhinged by the falling rain, mind locked on pushing together 100% to get the trophy, the teams kicked off the morning events consisting of badminton and volleyball. It was difficult to pinpoint a dominating team as all of them were giving it all they got. After 8 of the 12 scheduled matches were played, the rain poured hard creating an environment not safe enough to avoid injuries. The 4 remaining matches were decided through 4 thrilling games of indoor high paced dodge-ball.

After charging our strength in a well-deserved lunch break, we went into the afternoon events with one goal in mind, winning. To be honest, if there could be 4 winners in sports, then this day would've ended perfectly. That's how much it was close between winners and losers during those games.

A big congratulations, not just to the winners, but to every individual that made this event succeed in a perfect manner.



感謝祭

武田 桃子（日本）

当イベントは、日頃HdBにご支援をいただいている方たちへ、レジデントから感謝を伝えるパーティーだ。

当番のアイデアにより会場であるロビーは秋の落葉のデコレーションを施し、感謝のメッセージが書かれているもみじ型のカードを天井のいたる所からつり下げた。こうしたメッセージカードは見た目も賑やかになり、会場の雰囲気をも明るくするのでぜひ次年度もかたちをかえて続けるべきかと思う。

当日は、レジデントが楽しむ普段のアットホームな雰囲気とは少し異なり、一様に正装し、多くのゲストを前に当初は緊張した様子が見受けられた。もっとも賑やかな会場とプログラムが進むにつれて皆が腕を振るって作った数々の料理とお酒とともに、レジデントたちそれぞれがゲストの方たちと歓談することができ、少しずつリラックスした雰囲気になっていった。



デザートを提供後、歌、フルート、ミュージカル等、それぞれのレジデントが得意な分野のパフォーマンスをしてもらい、例年以上にゲストの皆さんに楽しんでいただけたのではないかと思います。また、最後に会場の皆で合唱をすることで、ゲストの方々にもパフォーマンスに参加してもらい、より一体感をもってパーティーを構成できたのではないかと考えている。

また新たな試みとしてショートムービーも上映した。これは普段外からはなかなかわかりづらいHdBの普段の生活を知ってもらう機会をつくるべきだという意見を反映してレジデントが作成したもので、皆が、感謝のメッセージをリレーするというThanksgivingならではの作品にできた。

当番としては、今年のThanksgiving partyが今までで一番だったという声をたくさんいただき、とても達成感を感じることができた。ご参加くださった皆さんに厚くお礼申し上げる。

Christmas Party

Manohar Rutvika Nandan (India)

The Christmas Party was held on the 16th of December. The toban had organized food, drinks and games for the residents and the guests. Each resident was allowed one guest. The dinner had 5 main dishes, 5 side dishes and 5 deserts. The residents helped cook this delicious meal. There was pizza, spicy Korean chicken, lots of good salad and many other things. The dessert was equally delicious. The guests looked really happy with the meal and there were few leftovers.

After the dinner, the residents had organized a dance show for the guests. As is the tradition, some guys dressed up as girls and performed a beautiful number. This included Hiro, Kenzo, Ko and Stef. The girls: Jeniffer, Natsumi and Hikaru performed a graceful dance on 'If I was you'. Everyone received a big applause.

Then we proceeded to play some games. The toban divided the guests in three teams. We played games that incited everyone to work as a team. The games included pictionary and limbo. Then, it came close to the time to say goodbye to the guests and start with the opening of presents. The toban had planned a secret santa for everyone. Everyone's presents were piled up below the Christmas tree and one by one we started opening the presents. Each resident opened their present and then tried to guess who it was from. Well, not everyone could. The joy on everyone's faces as they opened the gift was undeniable.

This way we ended the celebrations for the Christmas party and everyone proceeded to have a drink or two and chill with their friends thereon. It was a celebration filled with joy, love and laughter. The residents of HdB hope for more such upcoming celebrations. It was a perfect way to start the holiday season before everyone returned home or out for vacations.



セミナー（後期）

Nayoung Kim（韓国）



今期のセミナーはみんなで京都市市民防災センターを訪問し、地震体験・強風体験・避難体験・4Dシアター水害体験をしました。地震体験では震度4から7の揺れを体験し、どのように対処すべきかを教わりました。私は母国である韓国では地震を体験したことがなかったので、実際に激しい地震が起きた場合の対処マニュアルをあまりよくわかってなかったのですが、この体験できちんと身に着けることができました。私だけでなく、地震を経験したことのない国から来た HdB のみんなも実際に体験したことのでどのように対処すべきか学べたと思います。

また、避難体験では実際の火事が起きた時、煙のなかでどのように安全に建物から脱出するのかを体験しました。

さらに、実際に京都でどのような災害があったのか、その被害はどのようなものだったのかなどの説明もうかがうことができ、日頃から防災に関心を持つべきと考えるようになりました。

他の国に比べ自然災害が多い日本で生活するうえで欠かせない防災に関する知識を得ることができ、とても有益な時間を過ごせたのではないかと思います。このセミナーをきっかけに、HdB のみんながより安全な生活に心掛けて過ごすことを期待します！



High-Tech

Fevre Mathieu (France)

The High Tech Toban has to take care of everything that concerns High-Tech : printer, computer, routers, etc. The main and serious trouble that happened during the year is that we received 2 warnings about illegal movie downloading from the Internet Company. If we receive a third warning, the Internet will just be cut. So, **DO NOT DOWNLOAD ILLEGALLY!** There was some trouble about the printer and we had to find a new one. Some old residents gave a printer to Stef, and then Stef gave it to the dorm. However, some people using Mac had problems and could not print. The computer that is in the lobby is also very old and not working. To solve the problem of those who cannot print, according to me the best would be to buy a new computer, link it to the printer and then people who want to print something will just have to bring their files on a USB key. This investment will be discussed as soon as possible.

The router of the second floor broke down. Then, only the router of the 4th floor is working properly. So we connected all the Wi-Fi routers of the second floor to the router of the 4th floor. However, it makes the internet slower and less stable. A call to the Internet is needed but still haven't been done yet.

Finally, the High-Tech toban has to take care of HdB's internet blog. I uploaded all articles residents wrote about event that occurred during the year.



募金活動 PR

岡田 明日馨（日本）

募金活動から学んだこと

今回初の試みであるレジデントからの HdB 募金活動の PR 当番を担当することになりましたが、当初 HdB のことを何も知らなかったので、樋口さんに HdB の 30 年分ぐらいの Yearbook と HdB アルバム 30 冊ほどをお借りして、HdB の歴史を熟読しました。

Yearbook は読めば読むほど、面白いことに彼らの世界観や、国際に対しての考え方、日本人に対しての考え方であったり、人生に対しての価値観がこんなにも多様で、深いのかと驚かされました。

30 年前のアルバムを見ていると、今住んでいるレジデントたちにそっくりな写真を見つけたりして、この様な趣ある写真を見つけれののも HdB ならではだからなんだと後々気づかされました。今 HdB に住んでいるレジデントはこんなに HdB に歴史があることを知らないと思いますが、いっぱいあります。是非是非 50 年前のアルバムや Yearbook をご覧になってみてください。

それと Yearbook を通して気づいたことは、ここに住むレジデントは同じような共通点があることです。共通点を下を書いてみました。

[HdB のレジデントの特徴]

正義感がある。

国際に対する意識がある。

他人に対する共感意識が高い。

他人へのリスペクトを欠かさない。

日々の学びの大切さを知っている。

夢をしっかり持っている。

結局は人間なんだってことを知っている。

このような人材が集うのはここ HdB だけではないかと思っています。この寮は 1965 年に創立してから、53 年経ちますが、ここの寮から巣立って行った皆様は今も世界で目覚ましい活躍をされています。

この寮が普通の大学の国際寮と同じだと思って欲しくないこの活動を通して心か

ら思い始めました。私の大学には国際寮はありますが、色々なルールがあります。そのルールのほとんどは平等でないことが多いです。日本人が留学生と一緒に暮らすことができなかつたり、日本人学生が管理人役に回り留学生の面倒を見るという、アンフェアなルールが普通に大学に存在することに私は憤りを感じる事が多々あります。大学のスピーチコンテストなどで留学生と日本人が平等に暮らせる寮を大学に設置する提案をしたりしましたが、大学や教授からは良い案だと言われるだけでこれを実行するととなると、膨大な資金が掛かるなどで大学から後回しにされてしまいます。

私がこの場をお借りして皆様に HdB の募金のお願いをとするなら、

ここに住んでいるレジデントはとても多様で稀な人種が住んでいます。世界のトップの大学で勉強してきている人や、無名の大学だが直向きに人脈を作り起業を考えている人や、留学を考えて直向きに勉強している人や、自分の人生を見つめて頭を抱えている人、HdB の寮の問題について考えている人、日本の教育を変えるために人生計画をしている人、教育とディズニーランドをコラボさせアフリカの教育支援の計画をしている人など、様々な考えを持っている学生と研究生が住んでいます。

一見そんな人、世の中にいっぱいいると思われるでしょうが、彼らは只者ではないんです。

これを私がこの場で伝えることは難しいので、是非 HdB のイベントなどにお越しになってレジデントと会話してみてください。それが何よりの一番の証拠になるはずで

HdB は将来の日本人と外国人の国際交流と国際教育を良い方向にサポートできる場です。50 年後 100 年後も彼らをサポートしてくれる場が必要です。今が HdB にできる恩返しの時ではないでしょうか。人間一人では何もできません。生きていくには綺麗事関係なく助け合いが必要不可欠です。皆様、将来の HdB 寮生の未来を輝かしくするためにもご支援のほどをお願いします。

【資料】

公益財団法人 京都国際学生の家 役員等

監 事 (2017 年度)

浅 田 拓 史 (大阪経済大学准教授、公認会計士)
折 田 泰 宏 (弁護士)
秋 津 元 輝 (京都大学教授、OM 会員)

評議員会 (2017 年度)

岩 崎 隆 二 (和晃技研(株)代表取締役社長、OM 会員)
中 島 理一郎 (元同志社大学教授、OM 会員)
吉 田 和 男 (京都大学名誉教授、京都産業大学教授)
西 尾 英之助 (京都日独協会会長)
平 野 克 己 (日本塗装機械工業会専務理事)
薦 田 正 人 (薦田内外国特許事務所代表、弁理士、OM 会員)
山 田 祐 仁 (辻調理師専門学校、学寮運営委員長、OM 会員)

理事会 (2017 年度)

理事長

内 海 博 司 (京都大学名誉教授、NPO 法人さきがけ技術振興会理事長)

常務理事

飯 田 悠 哉 (ハウスファーザー)

理 事

上 村 多恵子 (京南倉庫(株)代表取締役社長)
村 田 翼 夫 (筑波大学名誉教授、OM 会員)
嘉 田 良 平 (四條畷学園大学教授、OM 会員)
吉 村 一 良 (京都大学教授、元 HF、OM 会員)

RUSTERHOLZ Andreas (関西学院大学文学部教授)

吉 川 晃 史 (熊本学園大学講師、公認会計士)

深 海 八 郎 (眺八海倶楽部総支配人)

永 井 千 秋 (公財) 神戸国際医療交流財団

医工連携人材育成コーディネーター、OM 会員)

HF	:House Father
HM	:House Mother
HC	:House Committee
OM	:Old Member

顧問 (2017年度)

所 久 雄	(社会福祉法人京都国際社会福祉協力会理事長)
神 田 啓 治	(京都大学名誉教授)
SPENNEMANN Klaus	(同志社大学名誉教授、 (公財)日本クリスチャンアカデミー理事長)
平 松 幸 三	(京都大学名誉教授、OM 会員)
森 棟 公 夫	(椋山学園理事長・学長、京都大学名誉教授)
柴 田 光 蔵	(京都大学名誉教授)

学寮運営委員会 (HC) (2017年度)

運営委員長

山 田 祐 仁	(辻調理師専門学校、OM 会員)
---------	------------------

運営委員

坂 口 貴 司	(三菱電機(株)、OM 会員)
鈴 木 あるの	(京都大学講師)
TANANGONAN Jean	(近畿大学講師、OM 会員)
DAVIS Peter	(Telecognix Corporation CEO)
戸口田 淳 也	(京都大学教授、元 HF 、OM 会員)
松 橋 眞 生	(元 HF、京都大学学際融合教育研究推進センター 健康長寿の総合医療開発ユニット)
長谷川 真 人	(京都大学教授)
北 島 薫	(京都大学教授、元 HM)
飯 田 悠 哉	(HF)
HIDDING Adriana	(HM)
Chairperson of Team	
Vice chairperson of Team	

職員 (2017年度)

樋 口 洋 子
清 水 良 子
吉 竹 慶 一

2017年度 補助金・寄付金・その他ご支援

2017年3月1日～2018年2月28日受領分

補助金

平成29年度京都市外国人留学生交流等促進事業補助金 (ハウス行事に使わせていただいております。)	1,000,000円
---	------------

寄付金（使途指定なし）

敬称略

寄 付 者	寄 付 者	寄 付 者	寄 付 者
Agnoek Sprangers	折 田 泰 宏	谷 口 平八朗	Floriano Steiner
Alessandro Andlfato	加 藤 哲 雄	辻 正 樹	フォーレンバイダー
Anika Arenz	鎌 野 幸 子	辻 本 圭 助	ボーイスカウト 京都第42団
天 野 敏 彦	川 野 家 稔	津 田 夏 帆	松 田 敬 一
新 居 哲	関西オランダ人協会	寺 本 美 智 子	三 浦 一 郎
Lee Kyungmin	木 戸 康 博	十 河 智 江 子	村 崎 直 美
飯 島 千 咲	木 下 研 一	中 上 和 子	村 田 翼 夫
伊 木 慶 四 郎	木原 文太左右衛門	中 島 理 一 郎	文 字 健 二
池 田 俊 一	金 智 華	仲 谷 正 博	矢 島 脩 三
石 田 栄 子	倉 田 麻 里	中 山 宏 太 郎	柳 田 由 紀 子
伊 藤 康 宏	琴 浦 良 彦	中 山 嗣 津 子	藪 下 義 文
稲 垣 千 晶	小 西 淳 二	中 山 道 子	藪 田 定 男
稲 葉 カ ヨ	近 藤 哲 理	成 田 康 昭	藪 田 安 晴
井 上 泰 日 子	呉 少 志	西 原 英 晃	山 上 和 則
岩 永 勉	澤 田 正 樹	西 本 太 観	山 口 忠 彦
岩 沼 省 吾	杉 本 直 美	野 島 和 伸	山 下 進 一
上 田 学	杉 山 喬 一	橋 本 修	山 本 慶 一
宇 野 賀 津 子	鈴 木 松 郎	坂 野 泰 治	山 本 雅 英
大 鹿 康 廣	Stef van der Strijk	福 田 修 平	吉 川 晃 史
大 菅 克 知	瀬 野 悍 二	福 本 和 久	吉 川 昭 一
小 川 侃	Ta-Yan Leong	福 本 学	吉 村 俊 之
置 田 和 永	高 田 徳 子	藤 原 信	Laszlo Hollosi
小 野 寺 良 信	田 中 徳 壽	古 川 彰・千佳	陸 川 良 子

寄付金（研究者棟新築と本館耐震補強・改修工事費用に用途指定）

敬称略

寄 付 者	寄 付 者	寄 付 者	寄 付 者
井 上 郁 子	窪 田 弘	高 田 徳 子	福 田 健
株式会社イセト一	小 谷 夏 美	Chein Lee	福 本 和 久
内 海 博 司	木 葉 丈 司	千 種 直 樹	細 川 治
大 景 勝 好	斉 藤 郁 子	十 河 智 江 子	三 浦 一 郎
奥 山 格	清 水 安 代	鳥 海 修 平	牟 禮 浩 子
梶 茂 樹	Sybille Girmond	土 居 貞 往	守 家 正 憲
嘉 田 良 平	杉 本 節 子	土 居 英 樹	森 棟 公 夫
香 月 桂 子	住 吉 トキ子	道 面 雅 量	楊 明
金 澤 成 保	盛 可 嘉	永 井 千 秋	Liu, I-Thing Huai-Ching
岸 本 雅 史	国際ソロプチミスト 京都たちばな	檜 橋 創	渡 辺 暁 彦
金 広 文	外 村 中	樋 口 順 一	渡 辺 恵 子

寄贈品・その他

国際ソロプチミスト京都一たちばな	文化体験（祇園祭招待）、ビールなど
Domenico Cantatore	ワイン

皆様のご支援に心より感謝申し上げます。

「研究者棟新築及び本館耐震補強・改修工事支援事業」
特定寄附金の募集に関わる募金目論見書

寄附金等取扱規程第 4 条に基づく特定寄附金についての目論見書内容は以下のとおりである。

平成 29 年 7 月 31 日
公益財団法人 京都国際学生の家

1. 「本館耐震補強・改修工事及び研究者棟新築支援事業」に関わる寄附金の募集

①募集総額：250,000 千円

②募集期間：2017 年 8 月 1 日～ 2019 年 6 月 30 日

③募集対象：研究者棟の新築と本館耐震補強・改修工事

- 1) 研究者棟新築：100,000 千円
- 2) 本館耐震補強・改修工事：150,000 千円

④募集理由：建築後半世紀が経ち、建物が現在の耐震基準に合わず、本館の耐震工事と改修工事、及び研究者棟の取り壊しと新研究者棟の新築工事費用にあて、50 有余年を続く個人と個人の出会いを重視した国際交流拠点としての活動を継続するため

⑤資金使途：受け入れた寄附金は 100%本事業（事業内管理経費を含む）に充当する。

以上

(公財) 京都「国際学生の家」の略史

年	月	出来事	関係者	備考
1961				
1962				
1963				
1964		日本側ハウスファーマーザー (HF)		
1965	4月	稲垣	H.Inagaki	
1966	3月	中山	K.Nakayama	
1967				
1968				
1969	4月	内田	I.Uchida	
1970	7月			
1971	4月	大沢	M.Ohsawa	
1972	6月	内海	H.Utsumi	
1973				
1974	4月	内田	I.Uchida	10周年記念式典 (五月十八日)
1975	7月	山本	M.Yamamoto	年報『出会い』第二号「10周年記念号」発行
1976				財団法人京都「国際学生の家」諸規則の改正 (四月一日)
				臨職問題解決
				財団法人万博協会より資金を受け、屋上改修工事
				臨職問題発生
				年報第一号発行 (二月十八日)
				西館完成 (十二月二十六日)
				自動車事故発生 (六月十四日)
				西館増築工事及び改造工事開始 (十一月八日)
				寄付金 (一般) の免税対象となる試験研究法人等として承認 (十二月二十日)
				雑文第一の二八号・文部大臣 (十二月二十日)
				学寮開工式 (四月十日)
				学寮開工式 (四月十日)
				財団法人京都「国際学生の家」規約制定 (十二月二十五日)
				4寄付金 (一般) の免税対象となる試験研究法人等として承認
				地鎮祭 (八月月中旬)
				学寮建設工事契約を楠竹中工務店と締結、総額約八千七百万円 (八月十日)
				財団法人京都「国際学生の家」寄付行為制定 (十二月十六日)
				理事長湯浅八郎博士就任 (十二月十六日)
				S O A M と H E K S より六十七万スイスフラン (邦貨約五千五百六十万円) の寄付を受ける (六月)
				S O A M と H E K S より六十七万スイスフラン (邦貨約五千五百六十万円) の寄付を受ける (六月)
				第一回京都「国際学生の家」建設実行委員会 (三月二十四日)
				第一回京都「国際学生の家」建設発起人会 (十一月十九日)
				家スイス東アジアミッション (S O A M) の「出会いの」を京都に実現するための募金活動開始 (一月二十一日)
				家スイス東アジアミッション (S O A M) の「出会いの」を京都に実現するための募金活動開始 (一月二十一日)

(公財) 京都「国際学生の家」の略史

年	月	役員	出来事
1977			S52 昭和五十年度・五十一年度のライオンズクラブ(京都二七クラブ)より 網寄付金総額千三百四十四万円を基本財産に組み入れ、「ライオンズ基金要 綱」を制定(六月二十四日)
1978			S53 しかし学寮よりの退去を拒否
1979			S54 HFパットナム氏とSOAMとの契約失効(三月)
1980	3月	琴浦 Y.Kotoura	S55
1981			S56 初代理事長・湯浅八郎博士逝去(八月十五日)
1982	2月		S57 京都地裁の仮処分によりパットナム氏の学寮よりの強制退去を執行 (四月一日)
1983	9月	古川 A.Furukawa	S58 第二代理事長に上野直蔵博士就任(一月三十一日)
1984			S59 創始者・ウエルナー・コラー博士逝去(八月二十一日)
1985			S60 第二代理事長・上野直蔵博士逝去(十月二日)
1986			S61 年報第八十九号「二十周年記念号」発行(三月八日)
1987	4月	内海 H.Utsumi	S62 国際交流基金より昭和六十年年度国際交流奨励賞地域交流振興賞を受賞 (十月一日)
1988			S63 財団法人京都「国際学生の家」パンフレット作成(五月二十八日)
1989			H1 第一回国際食べ物祭り開催(七月二日)
1990	8月	山本 S.Yamamoto	H2 第三代理事長・遠藤彰氏理事長辞任(三月三十一日)
1991			H3 第四代理事長に稲垣博博士就任(四月一日)
1992			H4

ブルーコーポレーター M.Burkolter

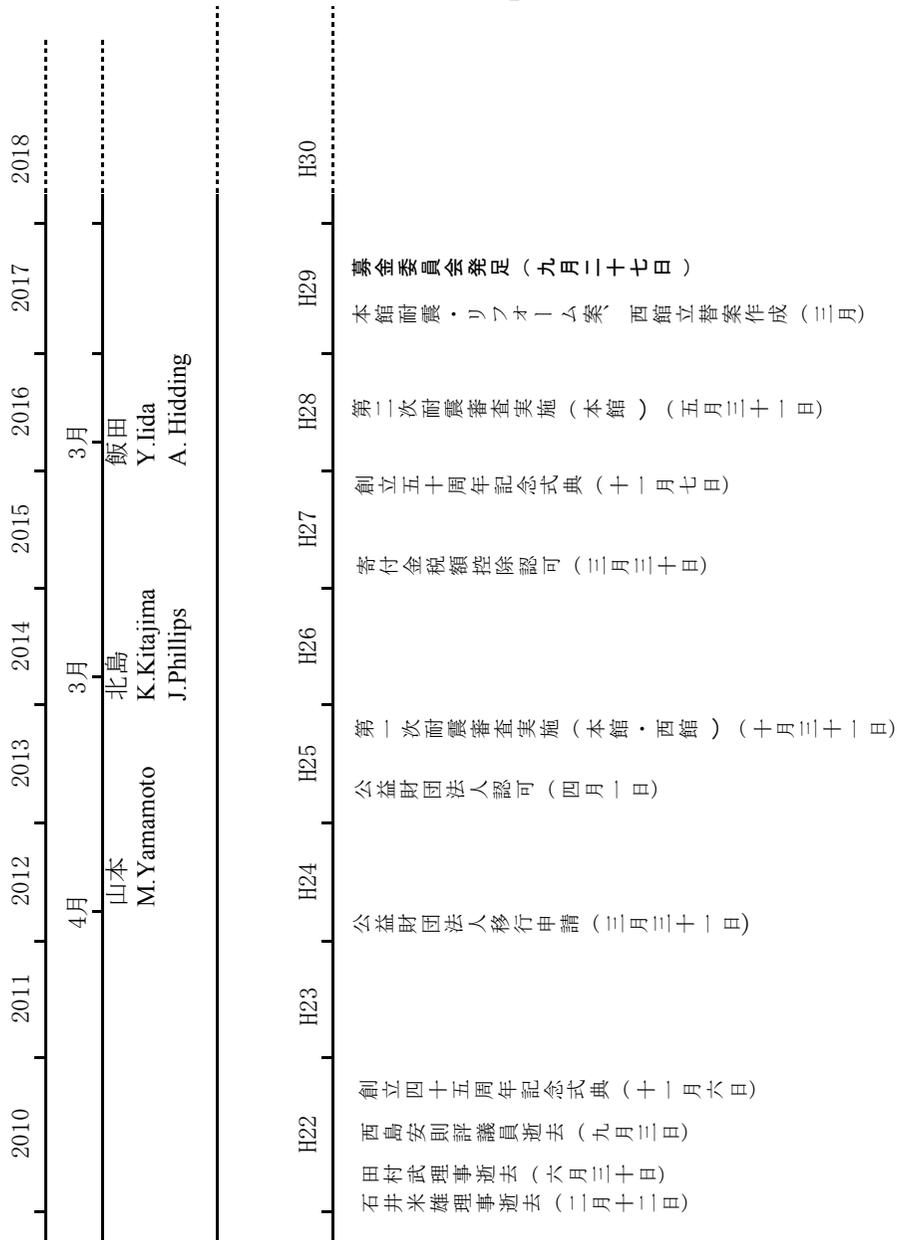
フォレンバイダー S.U.Vollenweider K.Otte

オツテ

(公財) 京都「国際学生の家」の略史

年	月	氏名	略号	出来事
1993	4月	吉村 K.Yoshimura	H5	
1994			H6	
1995	4月	戸口田 J.Toguchida	H8	
1996			H9	
1997			H10	
1998	4月	高橋 H.Takahasi	H11	
1999			H12	
2000			H13	
2001	8月	木戸 Y.Kido	H14	
2002			H15	
2003			H16	
2004			H17	
2005	4月	前川 K.Maekawa	H18	
2006			H19	
2007			H20	
2008			H21	
2009	8月	松橋 M.Matsumashi		
3月				
オッテ K.Otte				
3月				
ヴァイダー D.Wider				
H5				
H6				S 創立三十周年記念式典(七月八日) O A M 会長他五名来日、式典に出席
H7				
H8				
H9				
H10				
H11				S O A M との法的関係解消、ハウスファーマー二人制廃止
H12				財団寄付行為の改正(九月六日)
H13				全職員の退職・全寮生の退寮(三月下旬) 大工事修工事(八月末採採用(九月一日) 再再興祝賀行事開催(十月二十一日)
H14				
H15				
H16				
H17				
H18				
H19				稲垣博先生を偲ぶ会(十一月十七日) 第五代理事長・内海博司就任(五月二十日) 第四代理事長・稲垣博博士逝去(一月二十日)
H20				創始者夫人 ウェルナー・コーラ夫人逝去(七月十日)
H21				第三代ハウスマザー・ベニング好美逝去(七月十七日)

(公財) 京都「国際学生の家」の略史



(公財) 京都「国際学生の家」利用者の集計

● 学生の部 (レジデント)

国籍別利用者実数

1965年4月から2018年3月までの合計 81ヶ国 1003名

アフガニスタン	6名	コンゴ	1名
アメリカ	45名	コートジボアール	1名
アルゼンチン	3名	ザイール	1名
イギリス	12名	シンガポール	18名
イスラエル	1名	スイス	12名
イタリア	5名	スウェーデン	3名
イラク	3名	スーダン	1名
イラン	13名	スペイン	1名
インド	18名	スリランカ	11名
インドネシア	25名	セネガル	1名
ウズベキスタン	2名	タイ	42名
エジプト	7名	台湾	24名
エストニア	2名	タンザニア	4名
エチオピア	2名	チェコスロバキア	4名
オーストラリア	2名	中国	56名
オーストリア	1名	朝鮮	4名
オランダ	11名	チリ	3名
カザフスタン	1名	ドイツ	41名
ガーナ	1名	ドミニカ	1名
カナダ	4名	トルコ	12名
韓国	51名	ナイジェリア	3名
カンボジア	13名	日本	324名
キプロス	1名	ニュージーランド	7名
キルギス	1名	ネパール	6名
グルジア	1名	ノルウェー	4名
ケニア	6名	パキスタン	6名
コロンビア	1名	ハンガリー	6名

バングラディシュ	4名	マリ	1名
フィリピン	16名	マレーシア	23名
フィンランド	1名	マダガスカル	1名
ブラジル	9名	南アフリカ	1名
フランス	9名	ミャンマー	16名
ブータン	1名	メキシコ	2名
ベトナム	34名	モロッコ	4名
ベネズエラ	2名	モンゴル	10名
ペルー	3名	ユーゴスラビア	4名
ポーランド	5名	ラオス	1名
ボリビア	1名	リトアニア	1名
ポルトガル	3名	ルーマニア	1名
香港	14名	レバノン	1名
ホンジュラス	1名		

● 学者・研究者の部（スカラー）

国籍別利用者実数（同一人物の利用・同行家族を含まない）

1965年4月から2017年12月までの合計 95ヶ国 3048名(内国籍記載なし17名)

アイルランド	1名	ウズベキスタン	1名
アフガニスタン	1名	ウルグアイ	1名
アメリカ	335名	エジプト	26名
アルジェリア	4名	エチオピア	1名
アルゼンチン	1名	オーストラリア	39名
アルメニア	1名	オーストリア	19名
イギリス	111名	オランダ	32名
イスラエル	11名	ガーナ	3名
イタリア	44名	カザフスタン	1名
イラク	3名	カナダ	47名
イラン	20名	カメルーン	1名
インド	100名	韓国	205名
インドネシア	115名	カンボジア	4名
ウガンダ	1名	旧ソビエト連邦	14名
ウクライナ	9名	キルギス	1名

ギリシャ	4名	ノルウェー	7名
ケニア	3名	パキスタン	14名
コスタリカ	2名	バーレーン	1名
コロンビア	1名	ハンガリー	10名
コンゴ	1名	バングラディシュ	15名
ザイール	1名	フィリピン	38名
サウジアラビア	1名	フィンランド	10名
ザンビア	1名	ブラジル	27名
シリア	1名	フランス	107名
シンガポール	25名	ブルガリア	4名
スイス	185名	ベトナム	32名
スウェーデン	12名	ペルー	6名
スーダン	3名	ベルギー	6名
スペイン	11名	ポーランド	30名
スリランカ	11名	ボリビア	1名
スロヴェニア	1名	ポルトガル	8名
セルビア	1名	香港	43名
タイ	186名	ホンジュラス	1名
台湾	95名	マダガスカル	1名
タンザニア	8名	マレーシア	37名
チェコスロバキア	12名	南アフリカ	2名
中国	170名	ミャンマー	10名
チュニジア	2名	メキシコ	6名
朝鮮（在日）	3名	モロッコ	6名
チリ	7名	モンゴル	1名
デンマーク	5名	ユーゴスラビア	13名
ドイツ	297名	ラオス	2名
ドミニカ	2名	ラトビア	3名
トルコ	22名	リトアニア	1名
ナイジェリア	4名	ルーマニア	3名
日本	328名	ルクセンブルグ	3名
ニュージーランド	10名	ロシア	22名
ネパール	10名		

公益財団法人京都国際学生の家後援会会則

(目的)

第1条 この規程は、公益財団法人京都国際学生の家（以下財団という。）の後援会員の入会及び退会並びに会費の納入に関し、必要な事項を定めるものとする。

(会員)

第2条 財団の事業に賛同し、財団を支援する意を有するものは、後援会員となることができる。

2 会員になろうとする者は、所定の申込書を、代表理事あてに提出するものとする。

(会費)

第3条 会員は理事会で定められた会費を、入会時に納入するものとする。

2 年会費は会員種別に応じて下記各号のとおりとする。

(1) 個人会員 (OM 会員) 年額 一口 5,000 円

(2) 法人・団体会員 年額 一口 30,000 円

*OM= Old Member、元寮生

(退会)

第4条 会員は、いつでも退会届を財団に提出することにより、退会することができる。

2 前項の場合、当該年度の会費が未納のときは、これを納入しなければならない。

3 既納の会費は、いかなる理由があってもこれを返還しない。

(改正)

第5条 この規程の改正は、理事会の議決を経て行うものとする。

附則

1 この会則の施行に関し、必要な事項は別に定める。

2 この会則は、公益財団法人の設立登記の日（平成 25 年 4 月 1 日）から施行する。

3 この改正会則は、平成 26 年 3 月 10 日より施行する。（平成 26 年 3 月 8 日第 3 回理事会にて改訂）

施設概要

所在地	京都府京都市左京区聖護院東町 10		
敷地面積	1,900.28 m ²		
建築面積	531.21 m ²		
延面積	1,778.78 m ²		
構造	本館	鉄筋コンクリート造	地下 1 階 地上 4 階
	西館	鉄筋コンクリート造	地上 2 階
各階用途	本館 1 階	事務室、会議室、ラウンジ、遊戯室、行事用キッチン	
	本館 2・4 階	学生居室 34 室、キッチン 2 室、シャワールーム 2 室	
	本館 3 階	ハウスペアレンツ室、客室 7 室	
	本館地下	洗濯室、トイレ、倉庫、機械室	
	西館	客室 5 室、ボーイスカウト会議室	
学生居室	面積 13 m ²	洗面設備、ベッド、クローゼット、本棚、机、椅子、エアコン	
その他設備	日本庭園、バレーボール・コート、卓球台、ビリヤード、ピアノ		

編集後記

鈴木 松郎

(イヤーズブック編集委員、1966年入寮)

内海理事長による巻頭言「HdBは単なる『混住』型留学生寮では無い」では、HdBの建物の老朽化が進み、日本列島を襲う大地震にも耐えられる本格的修理を早く行ないたく、募金活動を始めている。HdBは「国際的な教育の場」と位置づけ、入寮出来る留学生は1ヶ国3人まで、日本人は1/3(約10人)と制限している。人種、文化、宗教等の多様性を尊重し「国際平和を築く人材育成の場」となっているHdBは単なる「混在」型留学生寮では無く、真の「国際的共生」型留学生寮である、と記されています。HdBは存続価値の高い学寮であり、是非 皆様のご支援を賜りたい。

【ハウスの改築と維持発展】

平野評議員(募金委員会事務局長)が「支援のお願い」に記されているように、「研究者棟新築及び本館耐震・改修工事」に向けて、総工費2.5億円の大半を募金でお願いいたします。そのためにはHdBの存在、活動意義、改修の必然性などを多くの関係者にお知らせして、支援をお願いしなければなりません。

永井募金委員「京都国際学生の家 募金活動所感」では阪神大震災に際し、復興支援のための募金活動の経験を記されている。創造的復興のために研究所設立構想が提案され、MITや吉川東大総長からの協力の意向が表明されて研究所が設立された。これを契機とし行政や関西経済連合会などの呼びかけで、多く企業から募金を頂けた。当時震災復興への理解が高く、知事等の要請効果があり、関係者の努力が実った。単に募金の要請をするのではなく、何をするのが重要です。今回のHdBの募金でも、他の留学生寮で出来ず、HdBでしか出来ない価値ある事業は何かを考え、強く発信することが重要だ。例えばコモンミールへの企業関係者招待、留学生の企業見学など。内海理事長の「日本人と留学生が共生する留学生寮(HdB)」では、「HdBは半世紀前から留学生と日本人学生と一緒に生活し、異なる国家、民族、人種、宗教、慣習、文化、イデオロギーなどの相違を、相互に認識し、出会い(Begegnung)を体験させる道場であり、国際平和に役立てようと地道な活動を続けている」と紹介されています。HdBは留学生と日本人の親交により、国際的な素晴らしい人間関係を創る場となっています。

【ハウスにおける国際交流】

村田編集委員長が関与されている「国際教育研究フォーラム」例会は国内ばかりではなく、外国でも開催されています。中国の大連、台湾やタイでは日本との交流が望ま

れているようです。HdB については、共同生活を送った留学生との貴重な経験などの情報提供・情報交換の機会を得るために、寮生は互敬会を開催し、同窓会では公開講演会、懇話会などが有意義であると提案されています。

内海理事長の「留学生の大学選びと THE 世界大学ランキング日本版」では3種類の世界の大学ランキングが紹介されています。評価基準などの比重は異なるが、いずれも「研究力」を中心にランキングしている。日本では大学評価には入試難易度（偏差値）が影響してきたが、近年は入学後の「教育力」が注目され、世界ランキング日本版では「研究力」より「教育力」が重視されている。世界の学生が日本の大学を留学先に選ぶ情報として日本版ランキングが役に立つ。大学では教科の国際対応だけでなく、留学生が快適な学生生活を送れるような環境、特に宿舍の充実は大切であるので、世界の若者達に HdB の情報も伝えたい。

平野評議員の「50年ぶりの留学生との関わり」では、HdB の理念と生活実感の経験は、留学生よりも日本人に有用であり、HdB 存続の危機とは、日本人の国際化が遅れる危機でもある、と進言されています。

A.ルスターホルツ理事の「諸宗教の理解に向かって」では、W.コーラー博士(HdB 創始者)の論文集「*Unterwegs zum Verstehen der Religionen*」が紹介されている。“*Begegnung* (出会い)”が重要なキーワードである。完全な理解に辿りつくことは不可能で、常に努力することが必要とのこと。また別人の論文紹介もあり、コーラー博士の居住地(現 HdB 所在地)で近隣住民とのトラブルがあったが、コーラー博士は自らの主張を撤回し、相手の主張を理解できないにもかかわらず、それを認めることとした。他人に自分の考え方を押しつけるのでは、理解が得られないし、平和も実現しないことも、コーラー博士の考えの背景にあったようです。

私(鈴木)は「HdB とボーイスカウトの関係」について書きました。ボーイスカウト京都第42団は HdB 所在地を本拠とする地域コミュニティーです。現在も HdB の一室を利用し、“国際食べ祭り”などにも参加し、HdB と交流し、活性化しています。ボーイスカウトは2015年には山口県きらら浜で開催された第23回世界ジャンボリーなどで、世界のスカウトと国際交流し、活躍しています。

【HdB を築立って】

Ta-Yan Leong さんの「Thoughts on the reconstruction and continuation of the Haus」では、ハウスの経験が役に立ち、社会に寄与することは疑いない。ハウス創設の信条や目的は、オリンピック精神とほぼ同じである。HdB では共同生活やハウス活動を通じて、国際的な友情と理解を提供する。OM 組織は再構築や継続を支援するために重要である。などが提言されています。

Ahmet Onat さんの「Mutual Respect」では、HdB は全世界から、異なる文化、異なる外観のまま、見知らぬ若者が集まった奇妙な場所と入寮時には思った。しかしやがて 平和で秩序正しい住処で、家庭の“暖かみ”や“気持ちよさ”を感じることが出来た。我々を互いに結びつけたのは“Mutual Respect (相互尊重)”であった。背景に

ある不都合、意見、個性などは尊重されるべきである、という見解です。

金智華さんの「Out of HdB」では、HdB で出会った友人達と過ごした時間は貴重なもので、色々と助言してくれたことに感謝しています。当初、HdB のいくつかのイベントやたまり場は嫌いであったが、今は幅広い視点で見ることが出来るようになった。イベントやミーティングは人を引き込み、人と会話し、異なる文化を知る好機会である。本年、数ヶ月間 HdB の外で過ごしたことにより、HdB への新鮮な視野が得られ、感謝の気持ちを送りたい・・・とのことでした。

ハウスを巣立った皆さんにとって、HdB での生活経験は貴重なものであり、国際平和に役立つものと思われれます。是非、HdB を耐震・改築し、存続して欲しいものです。

【レジデントより】

現寮生の文集より、ハウスでの生活を綴ったものの中から印象的なものを選び、掲載しました。

編集後記では皆さんの原稿を数行に短縮しました。大切な部分も割愛してしまっている可能性が高いので、是非、原文を確認してください。

公益財団法人 京都「国際学生の家」へのご寄付に対する 寄 付 金 控 除 に つ い て

当財団への寄付金に関しては、税務上の寄付金控除があります。

●個人の場合

寄付金が2千円を超える場合には、その超えた金額が当該年度の課税所得から所得控除として控除されます。

●法人の場合

特定寄付金として一般寄付金の損金算入限度額と別枠で損金算入限度額に相当する金額まで損金に算入できます。

これらのご申告の際には当財団発行の領収書をご提出ください。

※本誌 P.80 に後援会会則を掲載しております。

Haus der Begegnung, Kyoto

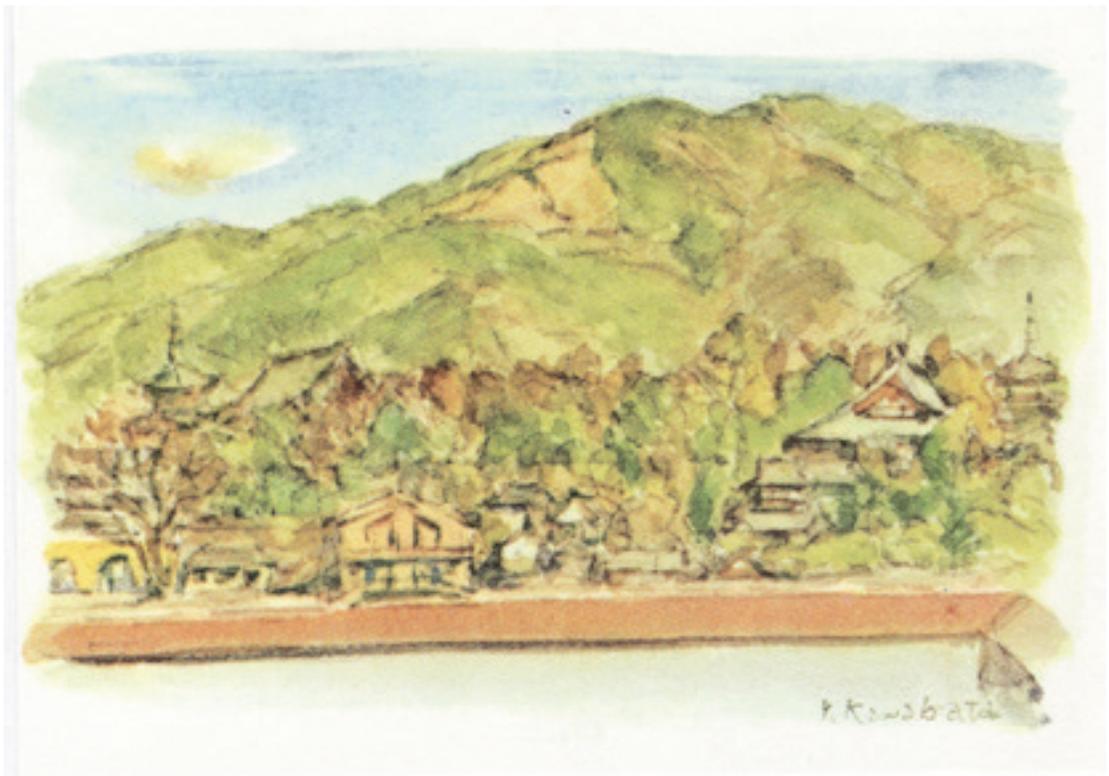
Year Book, Vol. 42

(Kyoto International Student House)
10, Higashimachi, Shougoin, Sakyo-ku,
Kyoto, 606-8325 JAPAN

イヤーブック 第42号

編集者	内海 博司	村田 翼夫
	蔦田 正人	鈴木 松郎
	飯田 悠哉	A. Hidding
	安間 更紗	赤尾 奏音

発行日	2018年3月31日
印刷所	(株)北斗プリント社 (075-791-6125)
発行者	公益財団法人 京都「国際学生の家」 〒606-8325 京都市左京区聖護院東町10 TEL 075-771-3648



学寮から大文字と黒谷寺を望む